外伝・七式探偵七重家綱

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外伝・七式探偵七重家綱

【Ｎコード】

Ｎ２８０６Ｒ

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

シクルさん著作の作品「七式探偵七重家綱」のキャラと設定を用いて製作した二次創作です。許諾を頂いているだけで本編とのつながりはありません。何が起こるかもよくわかりません。

「夢野三杉・上」（前書き）

●この小説はシクル先生著作の「七式探偵七重家綱　（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７６９８ｏ／）」を、著作者の許諾を頂いた上で制作した、自己解釈による二次創作品です。

●詳しい設定説明その他は意図的に省いているため、「七式探偵七重家綱」本編をお読みいただいた上でご覧下さい。

●時系列的にはＦＩＬＥ１１から１２の間の出来事とお考えください。もちろん、本編との繋がりはございません。

●作者の違い、解釈の違いにより、キャラクタの性格設定その他に差異が生じている場合がございます。

最後に、この小説制作の許諾を頂き、『七式探偵七重家綱』という素晴らしい作品を制作されたシクルさんに、最上の感謝を。

「夢野三杉・上」

「あーあ。どれもこれも不動産の広告ばっかり。うんざりするよ、まったく」

事務所前の郵便受けに入っていたのは今日の新聞と5、6枚の物件の広告。

載っているのはどれもここよりもこじんまりとした物件で、お決まりの小奇麗な文句を並べ立てた面白味もないものだ。

新聞の見出しだって同じ、大して変わり映えのしない議会や政治の話ばかり。ボクみたいな一般人が意見したところで何かが変わるわけでもないし、読んでいても興味が湧かないので、新聞はテレビ欄を流し見て丸め、不動産の広告は中身を見ずにくしゃくしゃにしてゴミ箱の中に放りこんだ。

これを刷って配達している人には悪意はないのだろうし、これが仕事だから仕方がないのだろうが、それが何社も連なり、毎日配達されるとなるとさすがにイラっとくる。誰が立ち退いてやるもんか。ここはうちの事務所だ。誰にも渡さないぞとつい握り拳に力が入る。

とはいえ、それを維持するだけのお金に困っているのは嘘じゃない。お金がなければ立ち退きは必至。

だからこそ汗水垂らして働く必要がある。嗚呼、悲しき哉(かな)資本主義。

この事務所の財政事情を憂い、溜め息をついて項垂れたくなるが、稼ぐ当てがまったくないわけじゃない。何しろ今日の依頼は街一番の資産家からのもの。成功させさえすれば依頼料を”言い値で払う”とまで言って来た。久々に稼げるタイプの依頼だ。失敗は許されない。

ボクは頬を軽く叩いて気合を入れ直し、事務所入口のドアノブに手をかける。

「依頼人の夢野さん、そろそろ来るみたいだから、家綱も準備……を……」
ボクはドアを開け放し、真っ先に目に飛び込んできたものを見て目を疑った。
リビングの茶色いソファに座っていたのは、この事務所の金遣いの荒い馬鹿探偵・七重家綱その人、なのだが。
「いいところに来たな由乃。……助けてくれ」
彼が身に纏っていたのは趣味の悪い青縞黒縞のパジャマでも、季節感が感じられないいつもの黒スーツでもなく、上は不気味なほどひらひらとしたフリルのゴシック・ロリータな服装に、下は巫女装束の袴だったのだから。
「あぁ、うん。そういう……趣味があったんだ、邪魔して、ごめん」
「馬鹿ッ、違げぇよ！　これには海よりも山よりも谷よりも深ぁい訳があってだなッ」
「誤魔化さなくていいよ。あと、山は特に深くないし」
「だぁかぁらぁ！　俺の話をちゃんと聞けぇえええッ」
こんな奴がボクの上司、というかこの事務所の所長なのか。ここを辞めて、どこか別の場所に永久就職したいと、今日ほど思ったことはない。

◆◆◆

「にわかには信じがたい話だけど、だいたいは分かった」
「そうか、そうか。分かってくれたか……」
「お前のその馬鹿さ加減はね。もうすぐ依頼人が来るってのに何やってんだよ！」
「そっちかよ！　だぁかぁらぁ、不可抗力なんだよあれは！」
趣味なんかじゃない。本当に困っているんだ、話だけでも聞いてくれとうるさく言ってくるので、とりあえず話だけは聞いてみた。
家綱の話によれば、ボクが新聞を取りに郵便受けに向かう間に、

お腹が空いたからと、備えられていたコーンフレークを食べるべく冷蔵庫の中の牛乳に手を伸ばし、器の中にフレークを入れて牛乳をかけようとしていたのだが、手元が狂ってテーブルの上に置かれていた”クロスチェンジャー”に牛乳をぶちまけてしまったのだという。

変な音がするからとボタンを適当にぽちぽちと押しているうちに、こんな良く分からない状態になった。助けてくれ……、という言葉で彼の説明は締め括られた。

馬鹿馬鹿しくてもはや笑う気にもなれない。

「それで？　どうやったら治るのさ」

「皆目見当がつかん。修理費にいくらかかるのかも含めてな」

「やたらめったら金がかかるのだけは勘弁してよ。うちの財政状況、分かってるでしょ」

「そうしたいのは山々だがな、俺にも訳が……」

――こんにちはー、昨日お電話させていただいた夢野と申しますがー。

来客用のチャイムと共に、妙に低い男性の声が玄関の向こうから聞こえてきた。約束した時間までまだ１０分も早いのにもう来たのか。

遅れるよりはいいけれど今日は都合が悪い。こんなアホみたいな格好の家綱と依頼人を会わせでもしたらどうなるか。

ヒかれるだけならまだいい。まだいいが、これが元で依頼を取り消されでもしたらたまらない。財政難の中久々に舞い込んだ大きな依頼だ。逃すわけには行かない。

「あ、あ、あぁあ。すみません、準備しますからもう暫くお待ちくださーい」

「お待ちくださいって由乃、なんとかできるのか、これを」

「なんとかできるかじゃない、するんだよ！　そこを動くなよっ家綱」

機械音痴のボクにクロスチェンジャーを短時間で直すのは不可能だ。だからと言って依頼人を長時間ドアの前に立たせて待たせておくわけにはいかない。
とすれば方法はひとつ。ボクは〝それ〟を探しに自室へと駆け足で戻った。

◆◆◆

「あのぉ……、家綱探偵。その格好は」
「ハロウィンの仮装です」
「いやいや、ハロウィンは先月終わったはずでは」
「いっ、家綱の実家の方では今月が旧暦のハロウィンなんですっ！
そうだよね？　そうだよな！？」
「正月の旧暦は聞いたことがありますが……、ハロウィンに旧暦なんてあったかな」
「そんなことより依頼！　依頼の話をしましょうよ、ねっ、ねっ！」
「おっしゃる通りです。では、場所を移していただけますでしょうか。由乃さん、家綱探偵」
やや髪の毛が後退し、綺麗なおでこを晒しつつも、それなりに若々しく、焦げ茶色の珍しい色合いのスーツを身に纏い、縁の青い眼鏡をかけた男性は、家綱の姿を見込んで呆気に取られていた。
その気持ちはボクにもよく分かる。顔だけ出た『カボチャの被り物』を頭からすっぽりと被り、無数の星々がプリントされた『カーテン』を纏った男が目の前にいるのだ。ボクならふざけるなと顔に一発パンチをぶちこんでとっと家に帰りたくなる。
彼の名は『夢野三杉（ゆめのみすぎ）』。２９歳という若さで、証券会社〝夢野コーポレーション〟の社長を継いだ、この街でも有数の資産家だ。
社長ともなると個人的な依頼一つ取り付けるにも忙しいらしく、早口で打ち合う日時だけを告げて、矢継ぎ早に電話を切ってしまっ

た。そのため、彼がどんな依頼をボクらにするのか全く分からない。
三杉さんは首を縦に振るとソファから立ち上がり、再び入口のドアノブに手をかけた。
「分かりました。ですが、ボクたちにも準備が必要ですので、その場所とやらをお教えいただけるとありがたいのですが」
「それでは……、一時間後にこの場所へ。お先に失礼します」
三杉さんはポケットの中でくしゃくしゃになっていた紙を広げ、テーブルに載せると、気が気ではない表情で事務所を出て行った。
何があったか知らないがとりあえずは好都合だ。さすがにこの”旧暦ハロウィン”の格好では出歩けない。ボクと家綱はどうするべきかと腕を組んで思案を巡らせた。

◆◆◆

「まぁっ。本当に”探偵さん”って感じですのねぇ」
「いやぁ、ははは。お褒めに預かり光栄です、奥様」
それからきっかり一時間後。三杉さんから渡された地図を頼りにボクたちが訪れたのは、何らかの事件を起こし、裁判を待つ被疑者たちが多数収監されている”留置所”。
彼の妻、『夢野茉都梨（まつり）』さんはあろうことか留置所の面会室、その柵の中にいた。やや茶髪かかった髪色に、たくあんのように太い眉毛。女性にも男性にも好かれそうな端正な顔立ちは、女をほとんど捨てているボクからしても羨ましいというか、美しく感じるものだった。
明らかに普通じゃない状況なのだが、当人は辛そうな様子など微塵も見せず、家綱のやぼったい格好を目をきらきらと輝かせて見つめている。あの恰好を隠すため、事務所の物置の中に放り込まれていた、彼の脛（すね）あたりまで裾の伸びた、かなり大きな黒のコートを着せただけなのだが、どうやらこれがかの名探偵・”金田一幸助”の外行きの格好のように見えるらしい。

この下にロリータファッションや袴を身に纏っていると知ったら、彼女はどう反応するだろうか。気になったが、試してみようと言う気にはならなかった。

「それでは、依頼と……この事件について、お話しいただけますか？」

「はい。何から話すべきか……」

「お茶をお出しできればいいのですが、今は監獄の中ですし。不便ですわぁ、まったく」

ボクと家綱は三杉さんと茉都梨さんから今回の依頼について話を聞くことにした。

三杉氏は名実ともに実力ある商社マンなのだが、そのために日本中を飛び回っており、妻の茉都梨さんと過ごす時間は殆んどなかったのだという。彼のことを心底愛していた茉都梨さんはそれを笑って許し見送っていたが、夫のいない淋しさには耐えられなかった。

暇と寂しさを紛らわすため茉都梨さんが始めたのが、美顔ローラーやビデオエクササイズなど、効くのか効かないのか分からない、如何わしい商品を通信販売で買い漁ることだ。会員制のものに入会し、他よりも安く、多くの商品を購入していたのだという。

家に帰る度に増えて行く怪しげな商品に三杉さんも疑問を覚えたものの、殆んど家にいられないことへの負い目から黙認していたという。

だが、事態は三杉さんの知らない間に意外な方向へと進んでいた。販売会社の〝キャンペーン〟に乗って、友達にその商品を勧めて会員を増やしていた茉都梨さんが、勧誘を断られたという理由で友人を包丁で刺し殺した容疑をかけられ、刑務所に収監されてしまったのだ。

……って、ちょっと待った！

「待ってください夢野さん。こうなったらもう弁護士の仕事でしょう、ボクたち探偵の出る幕なんて」

三杉さんは首を横に振り、それは違うとボクの言葉を遮った。

「確かに、ここまでなら弁護士を雇うべき事柄だ。しかし、関わっている〝会社〟がまた厄介なのです。由乃さん、〝盛森組（もりもり）〟という暴力団をご存知ですか？」
「盛森組……、というと」
名前だけならボクだって知っている。若干４５歳の組長・盛森満（みつる）を筆頭に、構成員の平均年齢が３０代半ばという妙に若い暴力団の名だ。
妙なのは構成員が若いだけじゃない。暴力団という組織でありながら、組織の拡大にはあまり興味を示さず、専ら契約している企業の商品を、わざわざセールスマンを雇って販売していることにある。
黒い噂もちょくちょく出ているが、確証がなく警察も手が出せないでいる、限りなく黒に近い灰色だ。
だんだんと、彼の言わんとしたことが見えてきた。
「まさか、茉都梨さんが会員になった通信販売業者、っていうのは」
「察しの通り、盛森組が経営しているものです。私も世間体がありますし、出来るなら穏便な方向で済ませたかったのですが……」
三杉さんはガラス張り越しに家綱の格好をなじって楽しむ茉都梨さんを尻目に、深く溜め息をついて言葉を継ぐ。
「茉都梨……あぁいや家内は取り調べで無罪を主張する際、〝盛森満〟の名前を挙げたんです。聞き違いだと思い、名前や絵を描かせてみたのですが、間違いなく本人でした。そのせいで盛森満本人が有らぬ疑いをかけられたと言いがかりをつけて来て」
「訴え返してきた……と、ということですか？」
「もちろん、家内の言うことは本当だと信じています。しかし、相手は決定的な証拠を残したことがない暴力団の組長、敗訴するのは目に見えてます。お願いです、盛森組がこの事件に関与したという証拠を探し出してください」
ずいぶんと長い前置きだったが、これが三杉さんの依頼の内容らしい。
ボクが話を紐解いて整理している間に、家綱は三杉さんの方に向

き直って、神妙な面持ちで口を開いた。
「依頼を始める前に一つだけ聞かせてくれ。仮に、あくまでも仮にだが、それでもし盛森満（モリモリマン）がシロで、奥さんがクロだとしたら……、あんたはどうするつもりだ？」
満（まん）じゃねぇよ、満（みつる）だ、と突っ込むボクの言葉を無視し、家綱は三杉さんに人差し指を突き立てて話を続ける。
「こんなこと言いたくはないがよ、罪を逃れようと平気で嘘をつく輩は世の中にゴマンといる。もし奥さんの言うことが嘘だったのなら、今度は何だ。俺たちにニセの証拠でも作れっていうのか？　俺ァ犯罪者にはなりたくないし、その片棒を担ぐのも御免だぜ」
家綱の厳しく、尚且つ尤もな言葉に、三杉さんはその手を突き立てた親指ごと握り締めて答える。
「その時は。その時は彼女と一緒に罪を被って償います。そもそも今回の事件は仕事にかまけ、家内の傍にいてあげられなかったことが原因。いざという時の覚悟はできています。だからこそ、私は”納得”したいんです。大事なのはクロかシロかじゃない、真実が何であるかです。どうか、お受けいただけないでしょうか、家綱探偵！」
家綱と向かい合う三杉さんの目を横から覗き見る。彼の目をしっかりと見据えていて、そこに嘘や誤魔化しはない、彼は本気だ。
そのことが家綱にも理解できたのか、彼は自分の手を握り締める三杉さんの手に、もう片方の手を被せて答えた。
「いいぜ、この依頼受けてやる。手間賃その他含めて依頼料は後払いだ。こっちの言い値できっちり頂くぜ」
「あぁ……！　ありがとうございます。ありがとうございます」
そう言って踵を返し、面会室を出ようとする家綱の言葉に、三杉さんは目元を緩ませて何度も何度も頭を下げる。バックに暴力団が関わっている上、幾分とややこしい話題だ。依頼してみたは良いが断られたらどうしようかと内心不安だったに違いない。
まぁ、不安だったのはボクも同じだ。あのままじゃやる気になれ

ない気持ちは分かるが、この依頼を反故にしてしまっては、今後の生活に響きかねない。ボクは彼らの見えない所でほっと胸をなで下ろした。

「あらぁ、もうお出になられますの？　またいつでもいらっしゃってくださいねぇ、探偵さんにかわいい助手さぁん」

三杉さんと対照的に、何も考えてなさそうなのほほんとした笑みを浮かべ、手を振って家綱を見送る茉都梨さん。果たしてこの人は事態をきちんと飲み込めているのだろうか。

そんな彼女にでれっでれな三杉さんを見て、ボクと家綱の心に一抹の不安が過ぎった。

◆◆◆

「いやね、良い店知ってんだよマジで。絶対後悔させないからさ、これから食べに行こ？　ねっ、ねっ、ねぇっ！」

爽やかだが、どこか必死そうな笑顔で声をかける男に、声をかけられた女性は戸惑った表情を顔に浮かべた。

「あ、あのう……失礼ですけれど、私、そう言う趣味は……」

事件の調査のために訪れた駅前の往来で、ボクは今猛烈に迷っていた。

家綱の人格の一人――肩まで伸ばしたサラサラの髪と、女性を誘惑する甘いマスク、黙っていれば文句なしのイケメン・晴義（はるよし）が、得意のナンパを１０回連続で失敗しているという、普通ならあり得ない光景を目にしている。

「一人二人ならまだしもまさかの十人。僕になびかない女の子がこんなにいるなんて……。なんなんだこれは、天変地異か何かの前触れなのか！？」

晴義のナンパが成功しないのは別に天変地異でも政権交代でも国家転覆なんて物騒な事態の予兆でも、ましてや彼がイケてない顔を

しているわけでもない。
クロスチェンジャーの不調でおかしくなった服装を隠すために肩から足元まですっぽり隠れるほど大きな黒いコートを着せたはいいが、さすがに足元までは隠せなかった。
今の彼は肩まで伸ばしたサラサラの髪と、女性を誘惑する甘いマスクという女性にもてる要素を、全身を覆い隠す黒いコートと、足元からちらりとのぞく”赤いハイヒール”というオプションで、元の良さを完全に殺した変質者になっていたのだ。女性が寄りつくはずがない。ボクも正直この場から立ち去りたい気分だ。
このままでは調査は一向に進まない。彼に事情を話して対策を講じるべきか、『晴義が本気で自信をなくして項垂れる』という、こんなことがなければ一生お目にかかれなかったであろうこの光景を、傍目からもう少し眺めてほくそ笑んでいるべきか、非常に悩ましい。
「なぁ由乃、どうしてだ、どうしてなんだい！？　なんで僕がこんな目にッ！　君は何か知らないか！？　いや、何か知っているんだろう！？　教えてくれよ、頼む！」
目に涙を浮かべ、必死な目でボクに詰め寄る晴義なんて初めて見た。いつもうっとおしい分、こういう顔をされて詰め寄られるのは悪い気がしない。
が、このままでは晴義のライフポイントはゼロ。自信を折って今回どころか今後も使い物にならなくなってしまいそうだ。再起不能（リタイア）されるのだけは避けたいし、ボクは仕方なく彼に事情を説明してやることにした。

「しっかしまぁ、どうしたものかねぇ。おい由乃、腹が減った。そこのコンビニで肉まん買ってこい」
「ボクは別にお腹すいてないし、そういう時は自分で買いに行けよ」
「この格好で行ったら不審者だろうが。それに靴ずれで足が痛くて痛くて」
「自業自得だろ。とにかく、ボクは嫌だね」

「くっそ……っ、可愛くねぇやつ。せめて靴、靴だけでも買ってくれよ」
彼に事情を説明したところで何かが変わるわけではなく。あまりのことに自信を喪失した晴義はボクの説明を聞くと同時にショックで引きこもり、ボクと家綱は駅前の往来、古ぼけたベンチに腰掛けて休んでいた。
何度クロスチェンジャーを押しても、靴だけはハイヒールのまま固定されてしまっているため、家綱は必然的にヒールのまま歩かざるを得ず（余談だが、オーバーハイニーソックスに赤のハイヒールが加わった家綱の格好にはこらえきれず爆笑してしまった）、擦れた足を痛そうにさすっていた。自業自得である以上、そこに一切の同情を挟むつもりはないのだが。
ボクたちは今、三杉さんにもらった”リスト”を片手に、茉都梨さんが”キャンペーン”で盛森組の商品を売った友人たちを探して当たっていた。
三杉さんが言うには、彼女が盛森組組長と出会ったのは、キャンペーンで商品を勧める際。信用度を高めるためにと毎回社長（組長であることは伏せていたようだ）も一緒に来ていたようで、それで顔をはっきりと覚えられたのだと言う。
リストに書かれていた名前はそれほど多くはない。が、聞き込みをする家綱がこんな格好じゃあ手に入る情報も雀の涙というもの。いや、情報が手に入ればまだいい方か。うち二人には逃げられ、さらに一人には通報されかけたものな。
まったく、この馬鹿は大事な依頼の時になんてことをやらかしてくれたんだ。こいつに見られない角度で、ボクは静かに小さく溜め息をついた。

「夢野三杉・中」

◆◆◆

――――はーい、どなたでしょうか。
「あぁ、先程お電話させていただいた探偵の家綱と申しますが」
――――あぁ、探偵さん。少々お待ちください……。
そうしているうちに聞き込み調査も13人目。茉都梨さんの友人の『彼方春香（かなたはるか）』さんの住むマンションまでやってきた。
春香さんは茉都梨さんの友人で、彼女を通じて盛森満と顔を見知った一人。電話で話を聞いたところ、盛森の態度を怪しみ、彼に気付かれないよう、密かにその声を”録音”していたのだという。
茉都梨さんが逮捕されたことをニュースで知り、ボクらが彼女の無実のために動いている探偵だと聞いて協力を快諾してくれた。
こんなに簡単に行くのなら、最初から電話で聞き込みをしていけばよかったんじゃないか。ボクも、おそらく家綱もそう考えたのだろうが、今までの徒労を思ってか口には出さなかった。
「お待たせしました探偵さん。こちらが……」
「会話の内容を録音したもの、ですか」
春香さんから手渡されたのは、掌に収まるほど小さな型の古いミュージック・プレーヤー。操作はかなり簡略化されており、操作用のダイヤルを回して聞きたい曲を選び、ボタンと共用になったそれを押し込んで録音やラジオ、曲の削除などを行えるようになっている。
ボクと家綱はイヤフォンを借りて早速録音内容の確認を行う。茉都梨さんの涼やかで聞き心地の良い声と、ややしゃがれ、どこか含みのありそうな声が交互に聞こえてくる。これが盛森満本人の声なのだろう。
念のため、春香さんにも茉都梨さんが描いた盛森満の写真を見せ

てみる。確かにこの人だ、と春香さんは声を上げた。
どうやら本当に信用に足る証拠らしい。プレーヤーを受け取り、ボクと家綱は彼女に背を向けて小さくガッツポーズをした。
「それではよろしくお願いします。茉都梨ちゃんを……」
「お任せください。ここまでくれば後はこれを彼女の旦那さんに渡すだけ。茉都梨さんの無罪は火を見るよりも明らかですよ」
こら、こら。それじゃあ失敗フラグじゃないか。春香さんを安心させるのはいいが、こっちが不安になるからその辺にしておけって、と家綱に耳打ちした時、だっただろうか。

――――彼方春香さん。あなたのお命、「お買い上げ」に上がりました。
ボクたちの視界の外から一本の”フォーク”が飛び、春香さんの後頭部を突き刺した。
春香さんは何も言えずに口をぱくぱくとさせ、後頭部から血を垂れ流して突っ伏してしまう。あまりに唐突すぎて、事態を把握するのに十数秒かかってしまった。
「な、ななな、何ッ！？　一体何が、一体誰が！　じゃなくて……春香さん、春香さんッ」
「落ちつけ由乃、彼女はもう死んでいる。なんだかよく分からねぇが……ヤバいぞ」
そう言って春香さんの首筋から手を離し、ゆっくりと下ろす家綱。冷静な口ぶりだが、脈を取る手は小刻みに震えている。
何が何だか分からないと困惑する僕らの前に、家のベランダの窓の開いている所から、整髪料でがっちりと固めた七三分けに、高そうな黒縁の眼鏡、やや出っ歯の、それほど若く見えない一人の男が現れた。
「お初にお目にかかります、お客様方。私の名前は……」
「由乃、危ねェ、伏せろッ」
男はスーツの中から長方形の何かを取り出すと同時に、ボクたち

に向けて角についたスイッチを指で軽く弾く。
瞬間、何か非常に鋭利なものが空を切ってボクたちに向かって飛んできた。
家綱は一瞬でそれが危険なものであると判断。ボクに伏せるよう促し、自分も側転でそれをかわす。家綱の予測は大当たりだ。かわされて行き場をなくした”それ”は、マンションのコンクリート塀に深々と突き刺さった。
一体何だとボクは刺さったものに触れてみる。驚くべきことにそれは、白い厚紙で出来たただの”名刺”だった。
男はボクたちを仕留めそこなったことに軽く落胆しつつも、気を取り直して口を開く。
「さすがは探偵とその助手。そう簡単には”お売り”いただけないようですね。あぁ、私『株式会社・元気盛森コーポレーション』の営業部部長・川瀬（かわせ）違留（たがる）と申します。良くして頂いているお客様の一人、茉都梨様の旦那様が、何やら不穏な動きを見せていると聞いて、あなた方を陰ながら尾けさせていただいていたのですが、まさかあのような証拠が存在していようとは。我が社のモットーは『クリーンなイメージの徹底』。それを脅かすものは例え何であろうと、どんな手段を用いても消滅させなくては。七重家綱探偵とその助手、和登由乃さん。あなた方の命、私に『お売り』いただけないでしょうか」
そう言ってボクと家綱に向け、立てた親指を振り下ろす川瀬。
おいおい、それじゃあ我が社は真っ黒ですよ、と自白しているようじゃないか。仕事柄変な奴と関わることは多かったが、ここまでおかしなやつも珍しい。
「ところで、こちらの黒い長方形の箱。一見何の変哲もない名刺入れではございますが、角にあるボタンを押すとあら不思議！　秒速７０ｍのスピードで飛び出す”武器”としてお使いいただけます。もちろん、通常の名刺入れとしても使用可能。有事の際にもこれがあれば一安心。現代社会人の新たなるステイタスになること請け合

いです。この名刺入れ、定価１５０００円のものを、今なら二割引きの１３５００円！　１３５００円でご奉仕いたします！　どうです、どうです！？　お客様もお一つ買われてみては？　」

よほど自分の力に自信があるのか、はたまた本当に馬鹿なのか、川瀬は先程用いた名刺入れを取り出して、”営業トーク”を始める。前言撤回。ここまでおかしな奴は、少なくともボクが見てきた中じゃあ初めてだ。そして、今後とも関わり合いになりたくない。

家綱もボクと同じことを思ったのか、深々と突き刺さった川瀬の名刺を壁から引き抜いて床に放り、わざと足で磨り潰した。

「名刺入れなら間に合ってる。そいつが売りたきゃ永田町のサラリーマン相手にでもやんな」

「そうですか、それは残念です」

川瀬は言うが早いか、家綱に飛び掛かり、右手を手刀にして振り上げる。あまりの早さに対応しきれず、家綱はそれをいなしきれず、両腕で受け止める。

「てめぇ、３０過ぎの営業マンにしちゃあ、動きが俊敏すぎンじゃねぇか！？　どうなってやがる」

「一流の営業マンにとって必要なのは、しゃべりの巧さや爽やかな笑顔ではありません。目的地へと赴く、契約を取る、機転の利き云々……すなわち、〝早さ〟です。のろまな営業マンは同輩や同業者だけでなく、世界そのものから取り残されてしまう。これは〝持論〟ではありません、私の『経験則』です」

そう言って、降り下ろした手を戻し、家綱と距離を取る川瀬。

一体、どうしたことだろう。両腕を十字に組んで防いだはずなのに、家綱の腕からぽたぽたと血が滴り落ちている。ボクと家綱が困惑していると、川瀬はいつの間にか切れた右手の袖を指で指しながら口を開いた。

「何が起きたか分からないようですねお客様方。その秘密はこれです。我が社謹製の万能包丁！　少し力を加えるだけで野菜から鳥の煮物の骨まで楽々切断、特殊合成チタン合金を用いた刃は切れ味だ

けでなく、耐久性も抜群！　１０ｍの高さから落としても歯こぼれ一つしない優れ物！　この包丁、通常２５０００円のところを、今回三割引きの……」

値段や値引きの辺りからは聞き流した。要するに、そんな物騒な包丁をスーツの袖の下に仕込んでいたということだ。一流の営業マンのくせに、スーツが破れることは別にいいのだろうか。

だがそんなことを気にしている場合ではない。再び家綱に詰め寄り、（もう片方の手にも仕込まれているであろう）包丁による文字通りの”手刀”が迫る。今の家綱にあれが避けられるだろうか。否、早すぎて避けられない。万事休すか。

――――オーゥ、イタイデースネー。ナニヲスルンデスカー。

川瀬の手刀は家綱の脇腹に深々と突き刺さった。その激痛に耐えられず男の野太い悲鳴が上がるはず……だったのだが、家綱、いや厳密には”その場所にいた碧眼で、金髪で鼻が高く、如何にも外国人といった風貌の男は自分の脇腹に刺さった包丁を易々と抜いた。

家綱が内包する人格のうちの一人、怪力自慢で大柄の男、”アントン”だ。

自分では対処し切れないと感じ、咄嗟に彼を呼び出したのだろう。その判断は正しいが、盾にさせるだけのために呼びだされたアントンが、どうにもかわいそうに見えた。

纏さんの巫女装束を、びっちびちのぱっつんぱっつんで無理矢理身に纏っている姿を見ると、尚更だ。

クロスチェンジャー……どこかで安く買えないかなぁ。

「ほほぉ。なかなか面白い能力をお持ちですね、お客様。そのような能力、この目で観るのは私も初めてです」

「オ話ハダイタイ聞カセテイタダキマーシタ。キャッチセールス、ダメ！　絶対デース」

いや、彼は別にキャッチセールスじゃないけどな。とりあえず乗り気になってくれたのならそれでいいか。

包丁の借りを返さんと、闘牛のような野太い声を上げて川瀬に襲

いかかるアントン。しかし相手は家綱ですら動きを予測し切れなかったほどの素早さの持ち主。アントンの大振りな拳は寸前でかわされ、かすりすらしない。しかも相手はそれに合わせて包丁による一撃を、的確に加えてくるのだからたまらない。

体の色々なところから血を流すアントンを見かねた家綱は、この状況を打開すべく別の”人格”を呼び出した。

「おいおい、僕は今落ち込んでいるんだ。勝手に出さないでって言わなかったかい」

聞いてねぇよそんなこと。とはいえ、晴義を呼び出した家綱の判断は正しい。彼の眼の良さとエアガンなら、閉所を素早く動き回る川瀬を捉えきれるかもしれない。

晴義は川瀬の攻撃一つ一つをかわしつつ、エアガンを抜いて反撃のチャンスを窺う。男にとってはやぼったい、ロザリーの普段着（ゴシック・ロリータ風の服装）でよくあんなことができると素直に関心してしまう。

「また変わりましたか。実に興味深い。しかし、それで私の命を”お買い”になれるとは到底思いませんが」

「君の安っぽい命なんていらないよ。ま、でも。くれるっていうんなら頂こうかな。……そこだッ」

空振って拳を振り切った一瞬の隙を突き、川瀬の鳩尾にＢＢ弾を叩き込む晴義。タイミングも、打ち込む位置も絶妙だ。立ってはいられまい。いられるわけがない。

「おぉっ、なかなかに強力な一撃。素晴らしい、素晴らしいですが……それだけでは私の命はお買い上げにはなれませんよ、お客様」

「何ッ、うぐ……うっ」

ボクは自分で自分の目を疑った。倒れているのは川瀬じゃない、晴義の方だ。腹部にフォークを突き刺され、血を流して片膝を突いている。逆に川瀬は鳩尾にＢＢ弾を撃ち込まれてもよろけないどころか、痛がる様子さえ微塵も見せていない。

撃ちこんだ場所もタイミングもばっちりだったはずだ。なぜ倒れ

ない。
「なんで、なんでだよ！　どうして晴義が……」
「私が何故倒れなかったか？　特別にあなた方だけにお教えしましょう」
川瀬はスーツの下のワイシャツの中から、自身の掌よりも大きい白いお皿を取り出してボクの問いに答える。
「その秘密はこちらのお皿！　先程紹介しましたあの包丁と同じ合金によって作られており、剛性は抜群！　こうして懐に忍ばせておけば、携帯用防弾ジャケットしてもご利用いただける優れ物でございます！　今、そちらのお客様の腹部に刺さっておりますフォークとこのお皿、５本と５枚、セット価格で今なら４８９０円、４８９０円でのご奉仕ですッ」
便利そうだ、１セット欲しいと少しでも思ってしまった自分が悔しい。そしてそんなことを言っている場合ではない。ボクや晴義が呆けている間に、川瀬は彼の眼前まで近づき、喉元にフォークを突き立てようとしているじゃないか。あのスーツの中に、どれだけ商売道具を隠し持っているんだよ！
「これにて、商談成立ですね。命をお売りいただき、誠にありがとうございます」
フォークを逆手に握りしめた川瀬の手が晴義の首筋に迫る。今度こそダメか、ダメなのか。
だが意外にも、血を噴いてのけ反ったのは晴義の方ではなく、フォークを突き立てようとした川瀬の方だった。
「あ～……お腹いったぁー……。いきなり呼び出しておいて何よこれ」
「く、葛葉さん！？」
先程まで晴義が立っていた場所にいたのは、茶髪のストレートロング、いつも顔の右半分が前髪で隠れていて、どこかミステリアスな雰囲気を漂わせる大人の女性、家綱の人格の一人『葛葉（くずは）』さん。クロスチェンジャーの不調で家綱のスーツを着ており、本人が醸す

どことなくミステリアスな雰囲気と相まって非常に格好良く見えた。
　彼女がここにいて、川瀬が口から血を噴いてのけ反っていると言うことは、彼がフォークを刺すよりも早く、葛葉さん自慢の銭投げが、至近距離で彼の顔にヒットしたということだろう。想像したくもない光景だ。
「ねぇ由乃君、どうしたのよこれ。なんで私、お腹や腕から血ぃ流してるの？」
「後で説明します。それよりも葛葉さん、目の前のあいつ！　あいつを仕留めないとヤバいんですよ」
「ええ～っ。お腹も空いたし……めんどくさいなぁ」
「そんなこと言わないでくださいよ！　ほら、このカロリーメイトあげますから」
「おっ、さんくー。しょうがないなぁ、やっちゃいますか」
　事態をきちんと把握しているのかいないのか分からないこの態度。得体の知れない相手を前にしている時、葛葉さんほど頼もしい人はいない。
「私がお客様から反撃を喰うとは……この衝撃、この感覚！　久しいですねぇ。こちらの用意した要件では不服と見える。では私も、さらなる交渉材料を用意しましょう……かね」
　ずり下がった眼鏡を上げて起き上がった川瀬は、ボクと葛葉さんを睨みつけつつ、スーツのポケットの中から、”髑髏”が描かれた手袋を取り出して両手にはめる。
　そこに何の意味があるのかは分からないが、そのままにしておくのはまずい。葛葉さんはポケットの中の小銭を取り出して構えた。
「何がしたいのか知らないけどっ、これ以上私や由乃君に近づかないでくれる？」
「そうはいきません。私もお仕事ですので」
「セールスマンさんって面倒な職業なのね。まぁ、どうでもいいけどっ」
「失礼ですが一つ訂正させていただきたい。私はセールスマンでは

ありません、営業マンです」
「どこが違うのよ、一緒じゃない」
言葉上は軽口のやりとりだが、この間葛葉さんは部屋の中を逃げ回る川瀬を狙い、ひたすら撃ち続けている。よくもまぁそんな余裕があるなと感心せざるを得ない。
葛葉さんの銭投げは早くそして正確だが、それでも川瀬の方が素早かった。彼女が切れた十円玉を補充すべくポケットを探ったその一瞬で、川瀬は彼女の懐に入って拳を握っていたのだから。
「終わり、ですね。お客様」
「何が終わりよ。あんたが素早いのはよく分かったわ。けど、この距離なら私だって外しようがないわよ」
素早さなら葛葉さんだって負けてはいない。彼が懐に入ると同時に、十円玉を彼の額へと向けて構えているのだから。
葛葉さんの言う通りだ。彼女ほど素早い人ならば、この状態で川瀬がどこに逃げようと外しようがない。しかし川瀬はそこに微塵の恐怖も見せず、にやりと笑って握り拳にさらに力を入れた。
「いいえ。私の射程圏内に入った時点で、あなたは既に負けているのですよ、お客様」
言うが早いか、川瀬の拳は葛葉さんのお腹に深々と突き刺さる。彼女もそれに対応し十円玉を叩き込んだが、首を捻って急所には至らず、彼の左肩に当たってよろけさせるに留まった。
「あんた……ねぇッ！　女性のお腹に拳入れるなんて、どうかしてるんじゃないの」
「これも仕事ですから。必要なら仕事と自分の考えやモラルは割り切るもの。デキる大人の鉄則ですよ」
「この……ッ！」
怒りに表情を歪ませ、痛みを堪えて十円玉を握って立ち上がろうとする葛葉さん。
状況はかなり厳しいけれど、これぐらいのピンチ、何度だって乗り越えてきたじゃないか。大丈夫、問題ない。少なくともボクはそ

う思っていた。
しかし、ボクの目に映るこの光景は、一体何なんだ。
「う……っ！？　か、変わった！　いや、戻った？」
「なんだよ家綱、また僕を呼んだのかい？　あ、あれ？」
「ウゥン？　ドウナサッタノデスカ家綱サーン……オ、オウ？」
なんだこれは。家綱の体が光り輝き、無意味に、しかも物凄い頻度で姿を変えている。
いや、”変えている”という言葉自体間違っているのかもしれない。『自分の力でそれを制御できない』とでも言うべきか。
「おいおいおいおい、どうしたんだよ家綱ッ」
「離れていろと言われていたのに、わざわざ近づいてくるとは。いやまぁ。私としては好都合なのですがね」
しまったと言うより早く、川瀬はボクの手からミュージック・プレイヤーを奪い取る。冗談じゃない、返せと川瀬に掴みかかるも、喉元にフォークを突き立てた。
「そちらのお客様のお命を先に買わせていただく所でしたが、まぁいいでしょう。それではあなたのお命、私めがお買い上げさせていただきます」
まずい。まずいまずいまずい。家綱がこんな状態になるなんて予想外にも程がある。
川瀬の身体能力は今の今まで十分に見せつけられた。ボクがどうこうできるようなものじゃない。冗談じゃないよ、こんなところで一つしかない命を捨てろっていうのか。嫌だ、絶対に嫌だ！
「……ほほぉ、やってくれましたねお客様。いざという時の保険、ですか」
「保険？　一体何のことだ」
ボクの喉元に突き立てようとしたフォークと、それを持つ手が止まる。
理由は分かっている。パトカーのサイレンが周囲に鳴り響き、こ

のマンションを目指して向かってきているからだ。
家綱が負けるとは微塵も思っていなかったが、彼らが戦っている間、いざという時のために１１０番通報をしていたことが、こんなところで役に立つとは。
「私の仕事は対人の営業です。ゆえに警察のような公的機関に顔を見知られるのは非常にまずい。私の仕最大にして至上の目的は、このミュージックプレイヤーただ一つ。これが手に入った以上、あなたたちには何の興味もありません。長くなりましたが、これにて失礼致します。ご縁があればまたお会いしましょう」
そう言って、川瀬はボクの喉元に突き立てたフォークを、白い布で綺麗に拭いてスーツの中にしまい、自身が入ってきた窓から、驚くほどあっさりと退散してしまう。
当面の危機は去った。が、それ以上の危機が今、目の前で起こっている。この窮地を脱する手立ては、ボクどころか家綱自身にも分からないだろう。
どうすればいいのか。どうすればいいんだ。分からない。何も分からない。
―――川瀬ェェェェェェェェェェェェ！！！
どうしようもできない苛立ちと、何も出来ない怒りが、言葉となってマンションの一室に響いた。

「夢野三杉・下」（前書き）

大変遅くなりました。
前回は読みやすさの関係で上中に分割しましたが、
家綱本編の上中下構成に合わせる関係で、今回はあえて分割していません。

ちょこっとだけ長いです。

「夢野三杉・下」

ボクは夜が好きだ。街の不粋な喧騒を掻き消す暗闇が、その暗闇を美しく彩るイルミネーションが大好きだ。だけど、この日の夜はどうしても好きになれなかった。何故かって？　それは……。

「ちょっと由乃ッ、これは一体どういうことですの！」

「由乃サーン！　〝座り〟ガワルクテ仕方アリマセーン！　ドウニカナラナインデースカ！」

「これじゃあ由乃君を一人占めできないわ……残念」

「あぁ……もう！　みんな静かにしてくれよ！　うるさくてしょうがない！」

喧騒を掻き消す宵闇も、暗闇を彩るイルミネーションも、家綱（こいつ）と、こいつの人格のみんなが発する光で打ち消してしまうからだ。

川瀬との小競り合いから数時間が経った。

人が死んでいる中にいてまずいのはボクらも同じ。ということで、人格を目まぐるしく変える家綱の手を引いて、ボクらも裏口から逃げ出した。

後で聞いた話なのだが、ボクたちが立ち寄った時間、あのマンションの周辺では人の通りがほとんどなく、彼方さんの頭を串刺しにしたフォークからは指紋が検出されなかった上、家の中の電話類が全て壊されていたため、川瀬はおろか、ボクたちのことすら警察は特定できなかったのだという。

聞かれたらキチンと証言する覚悟と準備はあるが、それが今すぐじゃなくてよかったと、ボクは一人で安堵の溜め息を漏らす。

「おぁ……っ、由乃、か」

「家綱。よかった、ようやく出てきてくれた」

そんなことを思っている間に、本日７５度目の〝呼び出し〟を経て、七つの人格の主・七重家綱がボクの前に姿を現した。

外傷こそ大したことはなかったが、自分の意思なく人格を交代し続けることは家綱の体にとって大きな負担になるらしく、ソファで横になっているだけなのに、目の焦点が合っておらず、荒い息を吐いて肩で呼吸をしている。

もはや「纏さんの装束を思い切り乱して纏っている」ことすら、ボクの中ではどうでもよくなっていた。

「もう夜だよ。大丈夫なのかよ、それ」

「お前にはこれが、大丈夫な男の顔に見えるのか？」

見るからに辛そうな顔してそんなこと言うなよ。こっちまで不安になるだろ。まあ、大丈夫じゃないってのは嫌ってほど分かったけど。

家綱と共に事務所に逃げ帰ってときには、たかだか30分に一回程度の頻度だったのだが、今では3分に一回、悪い時は一分以内に変わるというのだからたまらない。

「でも、どうなってんのさそれ。まさか、あいつのびっくりどっきりな通販道具のせいで」

「馬鹿野郎、んなもんでこんなことになってたまるか。あいつの〝能力〟の仕業に違いねぇ」

まぁ、そう考えるのが自然だろうな、と納得してボクは頷く。

「あの野郎、俺の中の〝命令中枢〟をいじくり回しやがったんだ。中の奴らの抑えが効かねぇ。あいつら、俺の言うことなんざ聞きやしねぇ。人の気も知らねえで好き放題やってやがるんだ」

家綱の言い方には語弊があるが、同時に的を射た言葉だとも思った。

七つの人格が一人の人間の中に内包されているんだ。むしろ、今の今まで問題なく過ごせていた方がおかしかったのかもしれない。

「治る……見込みは？」

「自分の体は自分が一番よく分かると言うが、ありゃあ嘘っぱちだな。見込みなんざ、いの一番に俺が聞きたいぐらいだ」

おいおい、そりゃないだろ……。なんてこった、このくそ忙しい

時に。
証拠は持って行かれるわ、家綱はこんな調子だわ。あぁ、依頼人の三杉さんに何て言おう。
――――家綱探偵、家綱探偵！　いるんでしょう！　夢野三杉です、開けてください！　大変なことになったんです！
そしてこれだ。大変なことになっているのはこっちも同じ。これ以上厄介事を増やさないで欲しい。そう面と向かって言えればどれだけいいだろうか。
ボクは家綱に了解を取った上で、ドアにかかった鍵を開けた。
開けるやいなや、依頼人の夢野三杉さんは慌てふためいた様子で事務所の中に足を踏み入れる。
革靴にこびりついた泥が酷い。一体どこを走ってきたんだこの人は。
「こんばんは由乃さん。家綱探偵は」
「いるにはいるんですけど、見ての通り捜査中に怪我を負ってしまって、お話は……」
「見ての通りって、家綱探偵はどこにいらっしゃるんです？」
何を言っているんだこの人は。疲れすぎて前もよく見えないのか？　あぁ、いや。三杉さんの言っていることは尤もだ。
ボクが家綱はここにいると指差した場所には、黒いコートで全身を覆ったロザリーが座っている。この一瞬でまた代わったのか。この忙しい時に！
ロザリーは不機嫌そうな顔をしつつも、背筋をぴんと伸ばし、綺麗な姿勢でソファーに腰掛けていた。
家綱の疲労は人格全員の疲労。辛くないはずなんてないのに気品の漂うこの態度。見栄っ張りにも程があるよ、ホント。
「あぁ、彼女はロザリー。ボクと同じ家綱の助手です。家綱は今、疲れて部屋で寝込んじゃってまして……用件はボクが伝えますから」
三杉さんはロザリーが何故家綱と同じコートを着ているのかを訝

しみ、ロザリーの方はロザリーの方で「あの男の助手になどなった覚えはない」と食って掛かるが、ボクはそれらを無視して三杉さんの言葉を待った。
　考えども答えが出なかったのか、三杉さんは諦めて口を開き、用件を切り出した。
「茉都梨の、家内の公判の日取りが早まったんです。それはおかしいと何度も裁判所に掛け合ったのですが、聞き入れてもらえなくて……」
「早まったって、確かに許せないことではありますけど、そんなに焦る心配はないんじゃないですか？」
「来週の公判を急きょ明日に変えると言うんですよ！？　これが焦らずにいられますか！」
「あ……明日ぁ！？」
　これにはボクも素っ頓狂な声を上げざるを得なかった。
　いや、公判が来週に迫っていたということも初耳でオドロキだけど、伸ばすならともかく、早めるっていうのはどういうことなんだ。
　まぁ、答えなんて一つしかないか。このことで得をする連中はひとつしかない。
「盛森組の根回し……ですよね、やっぱり」
「でしょうね。この事件では圧倒的にこちら側に反証の余地がない。裁判所からしても突っぱねる理由がありませんし」
　家綱は使い物にならないわ、重要な証拠は持って行かれるわ。おまけに茉都梨さんの初公判は明日ときた。絵に描いたような最悪の事態ですなぁ、まったく。
　次々に叩きこまれて行く不測の事態に、ボクは思わず頭を抱えてしまう。いや、そんなことして唸ってたって、何の解決にもならないって分かっているけどさ。
　三杉さんは落ち込んで頭を抱えるボクの肩を軽く握り、「話はまだあります」と言葉を続ける。
「それだけじゃないんです。その旨を家内に伝え、留置場を出てす

ぐ、〝川瀬違留〟と名乗る男から電話が入ったんです。彼は言いました。〝あなたの奥様をその鉄格子から出すことの出来る証拠。今なら１０億円の現金払いでお買い求めいただけますよ〟と」
「なんですって！？　そんな馬鹿な」
「馬鹿な……とは、どういう意味ですか？」
川瀬違留。奴は盛森満の部下のセールスマンだ。要求する代金の桁が無茶苦茶ではあるが、金が欲しいからって、自分の勤めていた会社を裏切るような真似をするとは考えにくい。
考えれば考えるほど、新たな事実が明るみになればなるほど、芋蔓式に分からないことが増えて行く。勘弁してほしいよ、もうたくさんだ。
「なるほど……そうか、それがやつらの〝狙い〟か」
「いっ……家綱っ！」
「家綱探偵！？　いつの間に！」
三杉さんが驚くのも無理はない。ボクだって驚いている。
この展開、このタイミングで家綱が『表』に出てきたのだから。っていうかお前、話聞いていたのか？
「分かった……とは、一体どういうことなのですか」
「この依頼を受けてからずっとおかしいと思っていたんだ。曲がりなりにもやつらは暴力団だ。口封じのやりようなんざ、いくらでもあったはずだろう。なのに何故、こうして裁判に乗って来たんだ？」
家綱は三杉さんの顔目掛けて人差し指を突き立てる。おーい、あんまり動かすとコートの下のゴスロリ衣装が見えちゃうぞー。
「答えはあんただ、夢野三杉さん。やつら、あんたの潤沢な資産に目をつけてやがったんだろうよ。俺たちみたいな探偵を呼んで、何かしらの証拠を手にすることも想定内だった。あんたも俺たちも、あえて泳がされていたのさ」
「泳がされていたって……、証拠はあるのですか！」
「襲われたんだよ、盛森組のセールスマンにな。あの野郎、『あんたを尾けていた』だの『証拠が手に入りすれば良い』だとか言って

やがった。やつらに取っては裁判の勝ち負けなんざどうでもいいんだろ。あんたから金を踏んだくれさえすればな」
　そうか、そういうことか。三杉さんはこの街一番の資産家だ。現時点では茉都梨さんの有罪はほぼ確定。例え証拠を奪われ有罪になったとしても、それだけの金をせしめさえすれば、ほとぼりが覚めるまで隠れ、新しい名前、新しい会社でやっていくことも難しくない。
　三杉さんは盛森たちの汚いやり口に怒りを覚え、どうすればいいんだと頭を抱えて項垂れた。
「私は……、私はどうすればよいのでしょう。彼らの求めに応じ金を差し出すべきか、負けると分かっている裁判に挑むべきなのか……」
　三杉さんが盛森組に金を払うか払わないかで大きく揺れている。
　確かに、前者を選べば茉都梨さんは助かるだろう。しかし、相手は通販業者を装った暴力団だ。無罪を文字通り金で買った三杉さんをこのまま逃すとは到底思えない。
「家綱探偵、私は、どうしたら……！」
　不安で堪らなくなり、顔を上げて（ボクはそうは思わないが）この場で一番頼りになる家綱に答えを求める三杉さん。
「知ったことではありませんわ。あぁ穢らわしい、頭のフケをこちらに飛ばさないでくださいます？」
　ちょっと、ちょっと。奥さんのピンチで気が滅入っている人に何言ってるんですか。
　顔を上げた三杉さんの問いに答えたのは家綱ではなく、彼の人格の一人『纏（まとい）』さんだった。
　極上の同性愛者（レズビアン）で大の男嫌いの彼女からすれば、確かにどうでもいいことなんだろうけど、それにしたって間が悪すぎるだろう。三杉さんが可哀想だ。
　家綱だと思っていた人がいつの間にか女の人に変わっている。三杉さんは彼女の言葉に怒ることも戸惑うこともなく、今ある事象を

把握しきれず、ただただ目をぱちくりとさせていた。
「あっ、あーあーあー！　てっ、手品です！　これは手品っ！　依頼人の方が気付かない間に探偵とその助手が入れ替わっているというパフォーマンスなんです」
「いや、でも彼女も家綱探偵と同じコートを」
「うちの探偵事務所内での小さなブームなんです。雨に濡れても中の服を汚さずに済むし、ほら、黒って格好いいじゃないですか！」
「それは分かりますが、何も事務所の中でまでお召しになられなくても」
　おぉい、おいおい。そろそろ言い訳も苦しくなって来たぞ。自分でなんとかしてくれよ家綱。そしておのれ川瀬。今度会ったらただじゃあおかないからな。
　そして、そんなことを言っている場合じゃない。ボクは三杉さんを睨み殺さん勢いで見つめ続ける纏さんを無視し、三杉さんに「払うべきではない」と話を振った。
「無駄ですよ。それこそ奴らの思う壺だ。言い方が悪くてすみませんが、あなたという金づるを奴らがこのまま逃すとは思えません」
「しかし……、だとしたら私はどうすればよいのですか！」
　言っては見たものの、対策なんてあるわけない。思い詰めた顔で言い返してくる三杉さんに対し、ボクは何も答えられなかった。
「んなもん簡単だ。そいつから証拠を奪い取ればいい」
　そんな中（纏さんの姿から戻った）家綱が三杉さんに言葉を返す。空気を読んでやっているのか？　と突っ込んでみたくなったが、今はそういう空気じゃない。
「わざわざあっちから持ってんだからこれ以上簡単な話はねぇ。そうだろう？　その取引場所ってのを教えろよ。俺たちも同行する」
「ちょっと待てよ家綱。お前、自分の体がどうなってんのか分かっているんだろう！？　無茶だよ」
　こんなくだらないコントのヒトコマみたいな状況で、仕事なんか満足にできるもんか。悔しいがこの依頼は諦めるしかないよ。そう

家綱に言おうとしたけれど、この馬鹿は「冗談じゃねぇ」と首を横に振った。
「久々に舞い込んだでけぇ依頼だぞ、はいそうですかって諦められるもんか。それにな由乃。男にゃ逃げちゃいけねぇ、やらなきゃならねぇ時があるんだよ。いつでもここでもそこでもだ。そして、今がその時だ」
いや、だから。どうするっていうんだよ。何の解決にもなっていないじゃないか。気合十分でもできることとできないことの分別ぐらいつけろよと突っ込んだが、家綱はボクの突っ込みを無視し、三杉さんの両手をを取った。
「見ての通り、今の俺はただのポンコツだ。だがあんたやあんたの奥さんを見捨てるつもりはないし、あのふざけた営業マンをぶん殴ってやらなきゃあ気が済まねぇ。失敗したら御慰み、成功すりゃあ大逆転の大博打だ。一緒に狙おうぜ、一攫千金一発逆転の大当たりってやつをよ」
そう語る家綱の目はぎらぎらと輝いていた。それほど川瀬に負けたことが悔しかったのだろう。
そんな家綱の目を見て手を握り返し、首を縦に振る三杉さん。こいつの言うことを信じて、話に乗る決意を固めたらしい。勝てる見込みなんてあるわけないのに、男ってのはなんでこう、勝てない博打を打つのが好きかねぇ。わけがわからないよ。

◆◆◆

朝焼けが木々を美しく照らす郊外の林の中。木々か開け広場のようになった場所が、盛森コーポレーションのセールスマン・川瀬違留の指定した取引場所だった。
取引の時間を公判当日早朝にしたのは、取引中三杉さんに熟孝させない考えあってのものだろう。さすが営業マン、人心掌握など造作もないというわけか。

三杉さんは１０億円の入ったジェラルミンケースを手にして広場の中央へと歩を進め、ボクと家綱は三杉さんが手配しここまで運転してきたたワゴン車の荷台に乗り込み、息を潜めて彼の様子を見守っている。

分単位で幾度となく変わる家綱の各人格を黙らせるのは骨が折れた。あぁ、早くなんとかなってくれないもんかなぁ。

午前６時２０分、取引の開始時刻だ。川瀬はまだ現れない。ボクたちはあいつにハメられたのだろうか？

――――お待ちしておりましたお客様。定刻きっかりのお着き、感謝致します。

律儀と言おうか期待を裏切らない男だと言おうか。

川瀬違留は定刻きっかりに三杉さんの背後からそっと声をかける。川瀬びっくりして身構える三杉さんを手で御し「背後から失礼致しました」と詫びを入れて一礼すると、彼に電源コードのついていないヘッドホンを手渡した。

「これは一体何です」

「我が社謹製のコードレスヘッドフォンでございます。ロウ・ハイ・ミディアム・アルティメットの四段階に音質を調整でき、超高感度ノイズキャンセラーを搭載。お客様のミュージックライフをさらに豊かに出来ること請け合いです。こちらの商品、税込２８６８０円の代物ですが、超・高額商品をお買いになられるお客様には、特別に無料でご奉仕させていただきます」

この後に及んでまだ営業かよ。１０億のオプションが三万円ちょっとのヘッドホンってひどくないか？　三杉さんに至っては意味も分かっていないみたいだし。まず事情を説明しろよ。

「ですから、これには何の意味が」

「あぁ失礼、ご説明致しましょう。こちらに取り出したるは、何のへんてつもないミュージック・プレーヤー。お客様がお探しの品は、この中に録音されている、ということです」

川瀬がスーツの右ポケットから取り出したミュージックプレーヤー。あの時あいつが奪っていったのと同じものだ。
それを寄越せと手を伸ばす三杉さんを御し、「落ち着きください」と声をかける川瀬。
「売買契約が成立しない限りこれはお渡しできません。まずはそのヘッドフォンをお使い下さい。周波数設定は済ませてあります」
なるほど、三杉さんが１０億という大金を出すに足り得ることを証明しようというわけか。
形式上追い詰められているのはそっちだというのに余裕かましちゃってまあ。
ヘッドホンに耳をかけてミュージックプレーヤーを聞く三杉さんが背中越しに後ろ手でピースサインを出してきた。
ボクたちが聞いた内容は予め三杉さんに伝えてある。敵は律儀にも本物の証拠を差し出してきたらしい。偽物だったらどうしようかと考えていたところだったが、とにかくこれで準備は整った。
「葛葉さんッ、今だ！」
「はいはーい、っと」
ボクは三杉さんの合図と同時に隣にいた『葛葉さん』に声をかける。
車の荷台の奥から放たれた葛葉さんの投げ銭が、正確無比に川瀬の右手を撃ち抜いて、持っていたミュージックプレイヤーを宙に飛ばさせた。
今ボクの隣にいるのが葛葉さんでよかった。もしもアントンやロザリーだったらどうするべきだったのだろう。とりあえず上手くいったわけだし、考えないようにしよう。
「よおし、取ったッ！」
川瀬の手を離れ、宙に舞ったミュージックプレーヤーを三杉さんがキャッチ。
すかさず彼に背を向けて一目散に車の方へと逃げて行く。
「これは……、なるほど。あの状態でまだ私の商談を邪魔しような

どと考えるとは。あぁ、なんという失態！　なんという醜態！　自分の犯したミスは自らの手で清算せねば！　否、清算するのだッ」
痛む右手を押さえながら、川瀬がこちら目掛けて走り出した。
やつが狙っているのはプレーヤーを持っている三杉さんではなく、車の荷台に乗るボクたち二人。邪魔をするボクたちを先に仕留め、それからゆっくり取り返そうということか。
「由乃君！運転、お願いっ」
「運転ったってボク、まだ免許もらえる歳じゃあ」
「エンジンキーを回してギアをD。それで右足のペダルを踏めば、子どもにだって動かせるわ。それとも何？　由乃君があのセールスマンの足止めをしてくれるの？」
そりゃあ無理です葛葉さん。ボクに選択権はないのか。ないんだろうなぁ。
葛葉さんが投げ銭で川瀬を足止めしている間に荷台から運転席に回り、ボクはシートベルトを締めてアクセルを踏んだ。
「ちょ、ちょっと！　何してるの由乃君ッ」
「あぁ、あれ？　あれれっ！？　どっどど、どうなってるの！」
キーを回したまではよかったんだけど、ギアの〝D〟ってのはどこにあるんだ、この車！
多分この1とか2って書かれたレバーがそうなんだろうけど、どこをどういじればエンジンをかけられるんだよこれ！　っていうかなんでブレーキペダル以外にもう一つペダルがあるの！？　こんなの絶対おかしいよ！　あぁもう、さっきからエンストばっかでイライラする！
しかも川瀬はすぐそこまで迫って来ている。もう時間がない！
あぁもう、どうしよう、どうすればいいんだ！
「うぅう……。えぇい、ままよ！」
こうなりゃヤケだ。ボクはギアを一番右下の所に合わせて思い切りペダルを踏み込んだ。
するとどうだろう。車は急に〝後ろ〟に向かって発進し、近づい

てきた川瀬を逆に撥ね飛ばすことができた。
川瀬は小さく鈍い悲鳴を上げ、近くの茂みへと飛ばされる。ざまぁみろ。
「やるじゃん由乃君。押しても駄目なら轢いてみなってことね」
いや、結果オーライですけどね。っていうか上手く言ったつもりですかそれ。
能力者とはいえ人間。車に正面（厳密に言うと後ろからなのだが）から衝突されて無事なはずがない。はずが……、ないのだけれど。
「これは〝罰〟……そうだ、罰なのだッ。私の判断ミスのせいで美しく組み立てられた計画が！　そのために掛けた時間が！　嗚呼無駄になってしまった！　ビジネスマンにとって時間は命。ならばその罰、自身の命で償わねばならない。そう、これは罰なのだ」
ちょっとちょっと、嘘でしょ。この後に及んでまだ立つつもりかよ。
逃げようと再び車のエンジンをかけてアクセルを踏み込むボクを尻目に、葛葉さんは荷台の扉を開けて川瀬の元へと向かって行く。
「葛葉さん！　乗ってください、早く逃げないと」
「由乃君、あたしたちの仕事は！　今回舞い込んで来た依頼はなんだっけ？」
「なんだっけって、奥さんの無実を証明できる証拠を、三杉さんの手に渡すことですけど」
「そうそ。プレーヤーは依頼人さんの元に渡った。けど、こいつをなんとかしない限り、それを証拠として裁判所に提出することはできないわ。車に轢かれたってお仕事をするような人だしね。だからこそ、ここで仕留めておかなきゃいけないのっ」
無茶だよ葛葉さん。言っていることは正しいしカッコいいけど、アントンの服を持て余し気味にだらしなく着ているあなたが、あの化け物セールスマンに敵うはずがないんだ。
ボクがそう忠告するよりも早く、葛葉さんはアントンへと姿を変える。クロスチェンジャーが故障してから初めて、着ている服と人

格が一致した。

「オォ、青々シク芳シイ香リ……都会ニモマダコンナ森ガノコッテイタンデースネェ。ッテ、私ハナンデコンナ所ニイルンデスカー、由乃サーン」

あぁあ、しかも現状を把握してないじゃんあいつ。やばい、やばいよ。川瀬の奴が！

「今度こそ、今度こそ逃がしはしませんよ！　私の贖罪のためにその命、当方にお支払いいただきます」

まだ事態を把握し切っていないアントンの腹に、川瀬の果物ナイフ（7点セットで１８００円のところを三割引きしたもの）が突き刺さる。いつものアントンならそれを物ともせず逆に川瀬の体をがっちりと掴み、きつい一撃を御見舞いできたことだろう。

しかし今は過剰な入れ替わりのせいで酷く体力を消耗している。疲労と痛みで反応が遅れ、ナイフを残して飛び退く川瀬を捉える事が出来なかった。

「遅い、遅すぎますよ家綱探偵！　私のような”Ｂ級”に遅れを取るとは、失望した、と言わざるを得ません！　私の能力は”体内のあらゆる『バランス』を狂わせる”能力。そう！　営業マンに、あぁいや人類にとって一番必要なのはバランス！　大幅すぎる値下げはいたずらにお客様の不安を煽るだけ、高すぎる値段設定には誰も飛びつかない。”線引き”が必要なのですよ！　私はどんな商品を売る時でも、どんな値下げ交渉になろうとも、三割以上値引きをすることはありません。三割以上の値引き！　それは、お買いいただくお客様への裏切り！　引いては製造メーカー卸売問屋様への裏切りへと繋がるからです！　お客様は神様、えぇそうですとも。しかし！　それを遵守することは我ら営業マンの務め、いや宿命なのですッ」

聞きもしないことをいけしゃあしゃあとまぁ。あんだけしゃべっててよく疲れないもんだ。

しかし彼の言うことにも一理ある。ぼろぼろなのは相手だって一緒なんだ。家綱”たち”には決定的に”気合”が足りていない。ぶん殴らなきゃ気が済まねぇって言ったのはどこのどいつだよ。反省半死の相手に気合負けしてどうするんだよ、家綱！

とはいえ、それも酷な話だろう。疲労困憊（ひろうこんぱい）の体を圧して殺す気まんまんの営業マンを相手にしているんだ。体は一つでも気合のノリは七人共通ってわけじゃない。精神論の話は好きじゃないけど、これじゃあ勝てるものも勝てないよ。

家綱当人にその力も気力もない。ならばどうする。ボクの出番か。いやいや、曲がりなりにもそれなりに長い間家綱の相棒をやってきたけど、ボクに何が出来るっていうんだ。こんなの……無理だよ、無茶だよ。

――――男にゃ逃げちゃいけねぇ、やらなきゃならねぇ時があるんだよ。いつでもここでもそこでもだ。そして、今がその時だ。

あぁもう、分かってるんだよそんなことは。でもボクは男じゃない。ちょっと護身の格闘技が出来るだけのか弱い子羊なんだよボクは。出来ることなんて、何もないんだ。

……あぁもう、あぁもうあぁもうあぁもう！　それでも足掻けっていうんだろ！　分かったよ！　やってやるよ！　男は度胸！　女だって度胸だッ！

ボクは運転席を降り、車の前に横たわり荒い息を吐くアントン――いや、家綱の全人格に向かって声を張り上げた。

「おい家綱！　それに葛葉さん、纏さん、ロザリー、晴義にアントン！　まだ依頼は終わってないんだぞ！　いつまでこんなところでおねんねしてるんだよ！　ガス欠寸前でグロッキーなのはあっちだって一緒なんだ、根負けで死ぬなんてカッコ悪いにもほどがある！

こんなピンチ、今までだって乗り越えてきたじゃないか、楽勝だったじゃないか！」

「由乃サーン。オ気持チハ分カリマースガ、ワタシモ家綱サーンタ

チモイッパイイッパイデ……」
　あぁそうだ、分かってる。そんなことは分かりきっているんだよ。スポ根漫画じゃないんだ、激励ひとつで立ち上がれるわけがない。ボクはどうすべきか？
　あぁ、この手だけは使いたくなかった。使いたくないけど四の五の言っている場合でもない。後先なんて考えるな。今を生き残れなきゃ、先も後もないんだ！　えぇいくそっ！
「分かった、じゃあこうしよう！　お前が、お前たちが川瀬に勝ったら、一週間の間、お前たちの言うことなんでも聞いてやるから！　なんだってするから」
　と、ボクが言うが早いか、川瀬は地面を強く蹴って飛び込んできた。気持ちは分かるけど頼むよ、空気読んでくれよ。こっちはまだ話終わってないんだよ。
「今更何をしようと無意味……、そう時間の無駄、体力の無駄なのですよ！　お別れです」
　包丁を右手に構え、アントンの心臓目掛けて飛び込んできている。もう駄目か、ダメなのか。

――――おい、由乃ォ。お前、さっきなんて言った？　ずいぶんとご機嫌な台詞が聞こえてきた気がしたんだがなぁ。
「えっ？　”一週間、お前たちの言うことを何でも聞く”って……」
　アントンに変わり、家綱が川瀬の包丁を受け止めたことにも驚きだが、ちょっと待った。こいつは今なんて言った？　しかもなんだその返しはそのにやけ面は。
　家綱は川瀬の包丁を血が滴るほど強く握りしめ、それを力づくで彼の懐に収めつつ口を開く。
「悪いなセールスマン野郎。俺ァまだ死ねないし死にたくもねぇ。今決めた」
「ちょーっと、魅力的な言葉が由乃君の口から出てきたしねぇ」
「嗚呼、なんということ！　私と由乃ちゃんがあぁんなことや、こ

ぉんなことを……想像しただけでも鼻血がっ」
「ずいぶんと思い切りのいいこと言うじゃない由乃ちゃん。女の子にこんな決断をさせたとあっちゃあ、僕も黙ってはいられない」
「面白ソウデースネー。ソノ日ガ楽シミデース」
「いい覚悟してるじゃありませんの由乃。こうなってしまってはやる気にならざるを得ませんわ。何せ……」

――――こいつを倒せば、由乃が一週間、私の”奴隷”になるというのだから！
どっ、奴隷！？　奴隷って何だよ、ボクはそんな約束してないぞ。そういう風に解釈するなよ！
もしかしたらボクは、彼らにとんでもないことを吹聴してしまったのかもしれない。後悔先立たずってのはこういう時に使う言葉なのか。あぁもう、なんてこった。
家綱の人格たちは入れ替わり立ち替わりにそう叫び、その中で最後に叫んだロザリーは突き飛ばして距離を取った川瀬の元へと『あえて』歩を進めて行く。
当然、手投げナイフや暗器の洗礼を浴びることとなったのだが、彼女は一切臆することなく、それら一つ一つを丁寧かわして彼の懐へと入り込んだ。
「馬鹿な、何故なのです！　何故私の攻撃が一つも……」
「私、勘が鋭いんですの。残念でしたわね」
おいおい、そりゃもう勘じゃなくて『予知』じゃないか？　川瀬が驚くのも無理がないと思う。（男物のスーツを着てはいるが）どこからどう見ても華奢でか弱い女の子に、正面からの素早い突きやニーキックを至近距離でかわされたとあっては、殺し屋セールスマンの面目丸つぶれだもんな。
「しかしあなたはただ攻撃をかわしているだけ！　それだけでは私を退けることはできませんよ！」
川瀬の言う通りだ。いくら勘が鋭いとはいえ、この疲労の中で攻

撃をかわし続けるのは難しいし、何よりロザリーに敵と戦う力はない。じり貧になるのは必至だ。
それを分かっているのかいないのか、ロザリーはくすりと微笑んで川瀬に言葉を返す。
「心配ご無用。『この間合い』に入った時点で、私の役目は終わったのですから」
「終わった？　それは一体どういう……」
川瀬がそう尋ねた瞬間、家綱（ロザリー）の体が光輝き、目にも止まらぬ早さで川瀬の腹から胸まで一直線に、美しい太刀筋の刀傷が刻まれた。
川瀬は仰向けで大の字になって倒れ込み、彼の眼前には脇差を構えた纏さんが立っていた。
「またつまらぬウジ虫を斬ってしまったわ……。由乃ちゃん、大丈夫？」
「えぇ。ボクは特に何も」
「そう、よかった……。じゃあ」
うわぁあ、目がぎらぎらと輝いてるよぉ。口ではボクを心配してくれているけど、絶対何か別のこと考えてるよあの表情。
っていうかなんですかそのわきわきと蠢（うごめ）く手は、指はっ！　ちょっと待ってくださいよ、まだ何も終わってませんってば！
「ボクのことよりほらっ、川瀬がッ」
その間に腹を押さえ、林の中に逃げていこうとする早瀬。賢明というか、当然の判断だ。ここで逃げられて仲間を呼ばれでもしたらそれこそまずい。
だから、こんなことしている場合じゃないんだって。纏さんは飛び道具を持ってないし、あぁどうしたらいいんだ。
「なら、僕の出番だね由乃ちゃん」
「晴義、いつの間に」
呼んでないのに、気持ち悪いぐらいグッドタイミングで勝手に出て来てニヒルに決める嫌な奴。晴義は急な変化のラグを感じさせることなく、無駄のない手つきでエアガンを握り、川瀬の太腿や腕及

び足関節を狙ってＢＢ弾を撃ち込んでゆく。
「いくらなんでも皿を太腿や関節に仕込むことはできないだろう？
今度こそ、終わりさ」
晴義は足を打たれてバランスを崩し、茂みの中へと落下した川瀬の首根っこを掴み、こめかみにエアガンをぐりぐりと押し付ける。
「君の負けだよ営業マン君。この静かな森に脳しょうの汚い花火をぶちまけたくなかったら、大人しくこの仕事から手を……おっと、いいところなのにっ」
台詞を言い終わる前、良い所で光と共に引っ込んでしまった晴義。ここ数日いいところないよなぁ、こいつ。
晴義の代わりに出てきたのは家綱だ。家綱は手にしたエアガンを腰に差し直し、銃口の代わりに鉄拳を彼のこめかみに叩きつけた。
「なっ、何故だ、何故なのです！　バランスこそ全て！　バランスの狂ったあなた方に勝ち目などあるわけがない！　なのに何故、私がお客様に見下されているのですかッ」
こめかみから血を流し、何故だか分からないと叫ぶ川瀬に向かい、家綱はもう片方のこめかみに拳を叩き込んだ上で言った。
「アンタのご高説は立派だよ。仕事にかける意気込みもすげぇ。でもな、思いの強さや意気込みでじゃあ負けられねぇんだよ。こちとらなぁ、お前を倒さねぇとなぁ、由乃を”おもちゃ”にできねぇんだよぉ！」
最悪だった。お前、寄りにも寄って最後の最後で、締めの台詞でそれ言うかぁ！？　全身から嫌な汗出てきたんですけどぉ！
こんなアホみたいな覚悟を背負った奴らに倒される川瀬が不憫でならない。当人だってそう思っていることだろう。隠し持っていたコンパス（方位磁石付き）の針で家綱の首筋を狙って突こうとするぐらいなのだから。
「この私がッ、営業で……覚悟の強さで負けるはずが、ない！　絶対にあり得ないッ」
「残念だったなセールスマン。今度こそお前は終わりだぜ。とどめ

を刺すのが俺じゃないのが、残念だがね」
目で追えるスピードにかわすには十分すぎる距離。でも家綱はそれをしようとはせず、拳を固く握りしめて振り被る。一体何を考えているんだこいつは。
しかしそんなボクの心配はまるっきり杞憂だった。コンパスの針が家綱の首筋に刺さらんとしたその瞬間、彼の体はまたも眩い光に包まれてその姿を変え、鋭利な針を文字通りその体で『受け止めた』からだ。
「オゥ？　”蚊”カ何カデスカー？」
頑強な肉体のアントンには、首筋に刺さったコンパスの針も蚊が刺したようにしか感じないらしい。まったく、身内ながらとんでもない奴だと思う。
川瀬の起死回生の一発はアントンの肉壁によって阻止され、残ったのは先程家綱が大きく振り被り、川瀬の頭上で力をためて待機している右の拳だけだ。
「悪徳セールスダメ！　絶対デース。シッカリト反省シナッサーイ！」
彼ら盛森組のセールス体系が悪徳だったのか良心的だったのか、ボクたちにはわからない。
けど、アントンの力強い拳を顔面に受け、惨たらしい悲鳴を上げ、メキメキと嫌な音を立てて歪んで行く川瀬の顔を見て、ボクは心底彼に同情した。大丈夫、なんだろうか、彼は。

「なんと……、なんというお高いお命。私の交渉要件ではまだ足りないとおっしゃるのですか。あぁ、商談は未成立ということなのでございますね。残念、誠に残念。七重家綱様。和登由乃様。またのご利用を、お待ちしております」
えっ、なんだこれ。”断末魔”なのか？　こいつの。どこまで仕事熱心なんだよこいつは。呆れに呆れて言葉もない。

「てめぇの命の価値を決められるのはてめぇだけだ。自分のモノサシで人様の命を測ってんじゃねぇよ。おとといく来やがれってんだ」
ただ一言、家綱の姿に戻った彼は、意識を失った川瀬に向かってそう吐き捨てた。

「家綱、大丈夫？」
「あちらこちらが痛むが動けないってわけじゃねぇ。この営業マンをぶちのめしたお陰で体の方もようやく落ち着いた。問題ねぇ」
駆け寄るボクの目の前で親指を立てて見せ、パチンコで大勝ちしたかのような笑顔を見せる家綱。
なんだよ、そんなに不安げな顔してたっての？　誰がお前の心配なんかするもんかっ。
「そっか。んじゃ三杉さんを迎えに行こう。もう川瀬が襲ってくることもないし、そもそも三杉さんが逃げた方向と裁判所、逆方向だし」
「クロスチェンジャーの方もようやく落ち着いてきたみてぇだし、いいだろう。いやぁ助かったぜ。あのコート暑くて暑くてしょうがなくてよ」
ボクたちが気の抜けた顔でそんなことを話していた時だろうか。先の茂みからがさっがさっと木々や葉の擦れ合う音がした。こちらに向かい、徐々に大きくなっていく。
森の動物たちが騒ぎを聞き付けてやってきたのか？　いや、動物たちなら危険を感じて逃げ出すだろうし、それにこの大袈裟な音。明らかに動物のものじゃない。
ボクと家綱はもしもの時に備え、再び気を張って音のする茂みの方へと目を向けた。

「あぁもうっ、ここは一体どこなんだ！　どこに行っても同じ景色に同じ木々！　私は今、どこにいるんだ！？」
気を張って損した。茂みの中から姿を見せたのは我らが依頼人・

夢野三杉さん。
焦りに焦った表情と言動から察するに、自分の逃げた方向が裁判所と逆だということに気付いて引き返して来たのではなく、単に森の中で道に迷ってここに出てしまっただけらしい。
間抜けな話だが、呼びに行く手間は省けた。
「あれっ、由乃さんに家綱探偵。どうしてこんなところに」
「あなたがここに戻って来ちゃったんですよ三杉さん。あぁ安心してください。厄介なセールスマンはボクたちの手で片付けましたから」
ついでにぶっ倒れた川瀬の方へ手を伸べてみる。熟れたトマトのように赤く染まり、不気味に変形したその顔を見て、三杉さんは身震いして目を背ける。
手柄の報告をしたかったとはいえ、配慮が足りていなかったなあと、ボクは一人肩をすくめて頭を垂れた。
「あぁ、お気になさらないで。それより、あなた方がこうしている、ということは」
三杉さんの問いに、ボクではなく家綱が口を開いて答える。
「終わったよ。人目につかない取引場だからな、多分まだやつらはこのことを知らないだろ。こいつのことを知られる前に、とっとと裁判所に行っちまおうぜ」
「ありがとうございます、あぁ、ありがとうございます。なんと……なんとお礼を言って良いやら」
「礼を言うのはまだ早いぜ。あんたの奥さんはまだ無罪になっちゃいねぇんだ。こっからは俺たちも干渉できねぇ、あんたたちの勝負だ。ここまでお膳立てしてやったんだ、負けたら承知しねぇぞ」
三杉さんは家綱のその言葉にまた頭を下げる。確かに、ここから先はボクたちには手の出し様のない世界だ。後は三杉さんに任せる他ない。
それでもなおひたすら頭を下げ続ける三杉さんに対し、家綱は彼に背を向けて口を開く。

「気にすんなよ。俺たちはムカつく野郎を一人ぶちのめした。それが偶然重なったってだけのことだ。あぁ、でも。タダでやってやったんじゃねぇぞ。報酬は後払い。こっちの言い値できっちり払ってもらうからな」

珍しくびしっと決めたかと思ったら、なんだよ最後の催促は。気持ちは分かるけど自重をしろよ自重を。あぁもう三杉さんごめんなさい。ホントにごめんなさい。

「勿論。約束ですから。さぁ、乗って下さい。あなた方も病院に行かないとマズいでしょう。途中までお送り致します」

がめつさ丸出しの家綱の言葉を聞いているのかいないのか、三杉さんは車の助手席と後部席のドアを開き、ボクたちに乗って欲しいと促す。

川瀬に勝って元通りになったとはいえ、全身に疲労が溜まっているのは嘘じゃないし、断る理由がない。ボクは家綱に肩を貸し、一緒に彼の車に乗った。

エンジンキーを回し、ギア（らしきもの）をNから1に動かし、ブレーキ以外の二つのペダルを細かく使い分け、三杉さんは何の苦もなくこの面倒くさい車を発進させて行く。

このタイプの車のことを”マニュアル車”であるとボクが知ったのは、もう少し先のことだった。

◆◆◆

それから先はもう、とんとん拍子に話が進んだ。

警察局の検閲を経て、正式に証拠として認可されたミュージック・プレーヤーは、盛森満が殺人に関わっていた証拠として絶大な効果を発揮し、彼の有罪にする決定的なものとなった。

有罪確定の瞬間こそ驚くことなく、笑みすらこぼしていた盛森だったが、”川瀬違留が証拠の取引に失敗した”ことを知って態度が

急変。
逃げるための資金が確保できず、警察によってさらなる余罪を追及されることとなり、保釈も効かないとなると当然か。組の内部にも近々警察の捜査の手が入ると聞いた。盛森組は近いうちに解体されることだろう。

夢野茉都梨さんは裁判終了の次の日に釈放され、夫の三杉さんと格子の外での再会を果たした。
こちらまで妬けてしまいそうなほどの熱々ぶりを見せつけ、何度も何度もボクたちにお礼を言った。家綱は「美人の奥さんと釣り合ってないよな。あぁいうリア充は爆発するべきだ」なんて物騒な台詞を吐いていたけれど、多分本心じゃないのだろう。目元がすごく優しそうだったし。
盛森組は解体されて、夢野夫妻にかかった容疑は晴れ。ついでにボクらも数えるのが億劫なほどの報酬を手に入れた。何もかもが上手くいって万々歳。これにて一件落着。
の、はずだったのだけど。

「はぁい、由乃ちゃん。あーん。どぉ？　どぉ？　おいしい？」
「えぇっ？　えぇ、まぁ、なんとか」
よく晴れたある日の昼下がり。ボクは纏さんとテーブルの前で向かい合って座り、彼女が器用にフォークでくるくると巻いたミートスパゲッティをせっせと口に運んでいる。
こういう場合、ボクはどう反応すべきなのだろう。彼女が嬉々としてボクに食べさせているそれは、残りもののトマトの水煮缶とひき肉と茹でスパゲッティで”ボクが”作ったミートスパだ。非常に反応に困る。
あぁもう、そんな目でこっちを見ないで。これ以上なんて言えばいいんですか纏さん。こんなの絶対おかしいよ。

「――纏、時間ですの。そろそろ交代ですわ」
「――待ちなさいロザリー。まだスパゲッティがこんなにも残っているのよ」
「――貴重な一日をそんなくだらない真似で浪費するのはおよしなさいな」
「――”くだらない”とはどういう意味なの！　いくら女の子とはいえ許しませんわよ」
傍から見ると訳の分からない光景だ。夜間の自転車のライトのように点いたり消えたりを繰り返し、ロザリーと纏さんが交互に出て来て言い争っている。同じ体の中にいて、言い争いなんて出来るものなのだろうか。
誤解のないように言っておくが、川瀬違留による家綱の肉体への干渉は既に解けている。そこに家綱の意思は介在しないが、別に彼の体がおかしくなったのではない。
川瀬違留を倒す。そのためにボクが払った代償は非常に大きかった。
一癖も二癖もある家綱の人格全員の”言うことを何でも聞く”なんて、いくら切羽詰まっていたからとはいえ無謀な約束を結んでしまったと後悔している。
三杉さんから貰った報酬は、怪我の治療やらクロスチェンジャーの修繕費を差し引いても思い切りおつりがくるほどでかいものだった。
しかしあろうことかこの六人、その報酬を俺たち私たちの自由に使わせろと言ってきたのだ。一人一人がかなり欲の強い連中だ。それが六人ともなるとたまったものではない。
できることならやめてくれと言いたいが、彼や彼女たちの”言いなり”になっている以上、ボクに拒否権はない。
彼らの言いなりになって早四日。三杉さんから貰った莫大な報酬は、その四日でほとんど尽きようとしている。なんなんだお前らは。バブル紳士淑女気取りか。それにしたっておかしいだろ。

「――おぉっと、由乃ちゃんの一人占めはよくないなぁ。そろそろ僕の出番じゃないのかな」
「――えーっ。そろそろ私にも貸してよぉ。もうお腹が空いちゃって空いちゃって」
「――由乃サーン、コノ”妹カフエ”ッテイウ所ニイキマショー。チッチャクテカワイイオンナノコイッパイイルトキキマシター」
「――あぁもう、うるせぇなお前ら。主人格は俺だぜ、いい加減すっこんでろよ」
もはや誰が誰だか分からない。家綱と葛葉さんとアントンと晴義と纏さんとロザリーと……、あれ？　これで全部だったっけ？　”七重”って名字なのに人格の数は家綱のそれを会わせて”六人”。この空白は一体なんなんだろうか。
せっかくだから聞いてみようかと思ったが、喉元に出かかったところで止めた。聞いてしまうと何かまずいと思ったからだ。”ボクたちの関係”すら危ぶみそうな何かをはらんでいそうな気がしたから。
ま、関係なんて何もないよね。名字は名字。能力は能力だしさ。

というか、そんなことなど今はどうでもいい。一週間のうちの四日、ようやく半分を過ぎた。
早く終わってくれよこの地獄。なんのために受けた依頼だったんだよこれ。
あぁもう、あぁもうあぁもう！

――――川瀬ェエエエエエエエエエエエエッ！

やりどころのない苛立ちと憤怒が、ボクの口を突いて言葉となって飛び出した。

「夢野三杉・下」（後書き）

途中から家綱という物語を書いているのか、自分の文章を書いているのか、仮面ライダーWのフォームチェンジ合戦を書いているのか分からなくなりました。

後日、簡単な後書きをこの下に記そうと考えておりますので、もうしばらくお付き合いくださいませ。

夢野三杉編・あとがき

とりあえずこの辺で終了になります。

「七式探偵七重家綱」という作品の面白さに感銘を受け、『もしも六人の人格が暴走して家綱にも押さえきれなくなったら？』という漠然としたアイデアからスタートした物語でしたが、なんとか一つの落とし所を得て、書いている側はほっと胸を撫で下ろしています。

「通常は前後篇、重要な話は上中下の三部構成」という本編の構成に倣い、当初はこちらも「前後編」で終わらせる予定で話を組んでいたのですが、

前半分だけでかなり文章が長くなり、本来家綱を読まれている読者の方々が億劫になるのではないかと考え、急遽全編と中編に分割し、残りを全て後半に回すと言う策を取りました。

まぁ、そのせいで後編で分割が効かず、かなり長丁場になってしまっているのですが。

非常に悪役のキャラの立った小説を制作するにあたり、”原作に埋もれないような悪役”を創作しなければならず、構想は非常に難航しました。

”家綱の人格が暴走する”というアイデアありきでやっていたので、一時期悪役は没個性的でいいよねと考え、当たり障りのないやくざみたいなものを想定していたのですが、作者のシクルさんとツイッター上でお話しているうちに「”殺す”とか”死ね”とかそういうことを一切言わない”セールスマン”が敵に回るのはどうだろう」というアイデアが突然降って出て、そこからばらばらになっていた”やりたいこと”を全部繋げて行きました。

アイデアや執筆動機こそ家綱の人格の暴走ですが、お話自体は”

川瀬違留（かわせ たがる）”という馬鹿馬鹿しいキャラクタのための小説ですね、あらゆる意味で。
彼を立てる関係で依頼人二人についてはほとんど掘り下げないかナレーションで済ませていますし。探偵もの小説なのにこんなのでいいんでしょうか。
盛り上がりや登場人物のセリフのほとんどに至るまで、家綱というかただの自分の文章だし。
家綱読者の皆様には申し訳ない気持ちでいっぱいです。

謎解きの面白さよりもテンポ重視でシナリオを組んでいたので、証拠辺りはあらかた適当です。
とはいえ、裁判を本筋の中に組み込んでいるのに証拠周りが適当なのはどうなんだ？　というご意見もごもっとも。
いえ、考えていなかったわけじゃあないんです。それなりに理由付けはしていたんです。
ですが一々表記するとテンポを削いでしまうのではないかと入らぬ心配をしてしまい、結局カットしてしまいました。
せっかく後書きという体裁を取っているので、後編に挿入する予定だった”動機や証拠の意味”その他の入った台詞部分をここに掲載してみようと思います。
時系列的には、下・冒頭で夢野と家綱たちが語り合う辺りになるかと思います。

◆◆◆

「ところで……、一つ聞いてもいいですか？　三杉さん」
「はい、なんでしょう」
「茉都梨（まつり）さんが殺人罪で裁判にかけられていることは聞きました。ですが、一体どのような経緯で逮捕されたのですか？　」
恥ずかしいことに、ボクたちは今の今まで〝茉都梨さんが何故捕

まったのかを聞いていなかった。
　クロスチェンジャーの一件もあったし、ボクも家綱も証拠だけ見付けて引き渡し、後は彼が雇った弁護士に一任しようと思っていたからだ。
　三杉さんは「私こそ今まで説明を省いていてすみません」と頭を下げ、事の次第を説明し始める。

「家内は元気盛森コーポレーションの上級会員でした。それこそ、社長である盛森満と共に他の会員や、一見の客を取り込もうと各所を回るほどに。ある日、家内は「しっくりしくる」と言うテーブルクロスを売りに、昔馴染みの友人の家に行きました。ついで買いをさせるためにいくつかの商品を準備して、です」
　三杉さんは出されたお茶をあまり美味しくなさそうな顔をして飲み干して言葉を続ける。
「家内がテーブルクロスを鞄から出そうと、視線を友人の方から外したその一瞬、ほんの一瞬です。その方の胸に深々と〝包丁〟が突き刺さり、叫ぶ間すらなく命を落としたのです。周囲には誰もおらず、包丁の柄には家内の指紋がはっきりと」
「それで、断定となったんですね。でもそれって」
　疑い様なくあなたの奥さん、茉都梨さんが悪いじゃないか、と言おうとしてボクは口をつぐんだ。
　まだ〝大変なこと〟の詳細を聞いていないし、余計なことを口走っていらぬ争いを引き起こすのは無駄だと思ったからだ。
　しかし、言葉にせずとも三杉さんにはボクが言わんとすることが読み取れたらしく、少し苛立った顔で言葉を続けた。
「ついているはずですよ。家内はその日、盛森コーポレーションの実演・体験販売の手伝いで包丁を握っているのですから。それを指紋を拭かずに回収すれば、あるいは」
　実演販売で握った包丁を用い、目にも止まらず気配も感じさせずに人を殺す。普通の人なら何を馬鹿なことをと笑うだろう。法廷じ

ゃあ到底通用するとは思えない言い訳だ。
だからこそボクには確信が持てた。そんな馬鹿みたいな話で本当に人を殺せるような人物。川瀬違留。あの男以外にあり得ない。
「そこまで分かっているのなら、そのことを警察や弁護士に話すべきです」
「無駄ですよ、あの会社には同じ包丁は何本もある。そんなもの、どうやって証明すればいいんですか」
なるほど、そうかとボクは声を上げた。あの中で繰り広げられていた会話。あれは盛森と茉都梨さんが実演販売をしていたときの音声だったのか。
「三杉さん、それならなんとかできるかもしれません」
「なんとかできる、とは一体」
「証拠があるんですよ。それを証明できる証拠が。でも、今は盛森組側に奪われていて……」

◆◆◆

見事に後付けです。後半を書きはじめるまで事件の全貌をほとんど考えていなかったのはクラスのみんなには内緒だよ。

「岩肌巖雄・上」　（前書き）

●丸半年ぶりの続編です。続編ですが「夢野三杉」編との繋がりは一切ありません。こちらから先に読んでいただいても何の問題もございません。

●回想等が入り混じりますが、家綱本編最終回後の世界を想定して執筆しているため、なるべく本編を読了いただいた上でお読みくださいますようお願い致します。

●前回に比べると、やや残酷な描写が挿入されるかもしれません。

「岩肌巌雄・上」

空に薄い雲がかかり、少しだけ冷たい空気が鼻孔を優しくくすぐる爽やかな朝。ボク――和登由乃(わとゆの)は、半年ほど前からの日課、早朝ジョギングを終え、七重探偵事務所の前まで戻ってきていた。

雲と雲の間から、朝日が美しく穏やかな輝きを放って顔を出す。お洗濯日和の心地好い朝だ。意味もなく気持ちが高揚する。

あの馬鹿はまだ布団の中で高いびきだろうな。相変わらずだらしがない。こんな気持ちのよい日に勿体無いぞ。

折角だ。簡単に朝御飯でも作って起こしてやろうかな。トーストを焼いて半熟卵のベーコンエッグを乗せて、浅煎りのアメリカンでも淹れてやれば、匂いに釣られて飛び起きて来るだろう。

あぁ、そんな話をしていたらボクの方がお腹が減ってきた。あいつのものよりも先に自分の朝食かな。あいつの目の前でわざとらしく美味そうに食ってやるのも面白い。

そんなことを考えながら事務所の前に帰り着くと、扉の前に誰かが立っているのが見えた。

肩にかかる程度に伸びた艶のあるストレートヘアに、どことなく理知的な雰囲気を漂わせる横顔。そしてそれを強調するぱりっとした黒のダブルのスーツ。兼ねてからお世話になっている超能課の岩肌成子(いわはだなりこ)さんだ。

ボクが気付いて声を掛けると、彼女は首を傾げて不思議そうな顔をし、ややあってぽんと手を叩いて口を開いた。

「あなた……和登さん、よね？　あぁあ、やっぱりそうだ。ちょっと見ない間に男の子っぽくなっちゃって。髪切っちゃったのね。似合ってたのに勿体無い」

「いやぁ、ははは。こっちの方が過ごしやすいものですから」

どうやら、ボクが誰なのか分からなかったらしい。こっちからしてみれば、今までの格好や言動の方が違和感があったんだけど、そ

こに違和感を持つ人がいると思うと、イメチェンすべきじゃなかったのかなという気にもなる。
「所で、今日はどうしたんですか？　こんな朝っぱらから」
「あぁ、ご免なさいね。仕事の都合で朝方にしか暇がなかったものだから……」
「構いませんよ。時間も時間ですし、一緒に朝食でもどうですか？　簡単なものしか作れませんけど」
ボクの言葉に、岩肌さんは「折角だけど」と首を横に振った。
「お構い無く。大した用事じゃないの。この事務所の所長、七重家綱。彼に少し用があるだけで」
「家綱に……ですか？」
岩肌さんの予想外の返答に、ボクの方が戸惑ってしまった。岩肌さんと家綱の間に面識はなかった筈だ。対超能力犯罪のエリートが、七つもの人格を持つ家綱に接触を求めてきた。しかもこんな朝早くに。あの馬鹿、とうとう法に触れるようなことをしたんじゃないかと焦ったが、直ぐ様落ち着いて佇まいを直す。
いくら馬鹿だろうと、家綱（あいつ）がそれほどの罪を犯すとは、到底考えられなかったからだ。
「ま、まぁ。立ち話も何ですし、中へどうぞ。すぐにお茶を用意しますから」
「ならお言葉に甘えて。あぁでもお茶は要らないわよ。ほんの少し会うだけなんだから」
面と向かって話して見なきゃどうにもならない。ボクは意を決して事務所の扉を開けて、岩肌さんを中に招き入れた。どうか、物騒なことになりませんように。
「お、おぉ由乃。今日はずいぶんと早かったなぁオイ」
「珍しいね、家綱がこんな時間に起きてるなんて。あ、この人は岩肌成子さん。お前に話があるって朝から……」
ボクは目を疑った。そして同時に、奴の頭を来客用のスリッパで思いきり叩いていた。蒟蒻を思いきり叩いた時のような快音が周囲

に響いた。
「由乃、てめェ！　何しやがるんだこの野郎！」
「お前にそれを言う資格はないだろ、お客様が来ているのに、なんだよその格好！」
いきなり叩いたこっちもそりゃあ悪いけど、今の家綱の格好を見たら誰だってそうすると思う。はち切れんばかりの女の子物の桃色フリフリパジャマを、三十路近い男が身に纏ってお客様を出迎えるとあっちゃあ……。
恐らく寝ている間に、何かの拍子にロザリー辺りと入れ替わっちゃって、家綱の寝間着の甚平が気に入らなくて今のパジャマに着替え、そのまま寝てまた入れ替わった……って所なんだろうけどさ。間が悪いにも程がある。
「変わった……ご趣味をお持ちなのね。七重さんって……」
あぁ、もう。岩肌さん滅茶苦茶引いてるよぉ。パジャマの裾からちらりと覗く子汚い脛毛に釘付けだよぉ……。
このままじゃ埒が明かない。ボクは家綱にとっとと着替えて来いと促し、ドアの前で茫然とする岩肌さんに中に招き入れてソファーに座らせることにした。
「先程はお見苦しい物をお見せしちゃって……」岩肌さんに少し濃い目のコーヒーを差し入れて、ボクは言う。「それで、家綱に何の用が？」
岩肌さんはコーヒーを飲んで溜め息を漏らす。一息着いてようやく冷静になれたようだ。
「別に大したことじゃないのよ」岩肌さんは佇まいを直して冷静な口調で言った。「彼に言伝てがあるのよ。こんな朝からでご免なさいね。なるべく早く伝えて欲しいと言うのが『故人』の頼みだったものだから……」
「故人……ですか」
故人の言伝てねぇ。しかも警察官である岩肌さんが伝えに来るようなものだとなると、内容が全く予想出来ないな。家綱のやつ、ボ

クの知らない間に何をやったんだ？
　そんなことを考えていると、いつもの黒スーツに着替えた家綱がソファーの前にやって来た。
「悪りィな別嬪さん。いつもはあぁじゃないんだ。さっきのはちょっと……間が悪かったって言うか」
　今更取り繕ったって無駄だと思うぞ。部屋ん中で帽子被って、吸えもしない煙草くわえて、そこまでして美人に格好付けたいのかお前は。
　岩肌さんはさっきとは打って変わった家綱に少し戸惑うも、軽く咳払いをして立ち上がり、握手を求めて手を差し出した。
「先程ご紹介に預かりました、岩肌です。朝早くにすみません、貴方にどうしても欲しいという言伝てがあって」
「言伝だって？」岩肌さんと握手を交わし、不思議そうな顔で家綱は言った。「一体誰から。あんたを通さなくても、そいつが直接ここに出向けばいい話じゃないのか？」
「無理よ」岩肌さんが冷ややかな口調で言った。「彼は既に死んでいるもの」
「死んだ？　ってことは言伝てってより遺言だな。誰だ、そんな面倒なものを持ち込んだのは」
　家綱の問いに、岩肌さんはコーヒーを口にし一拍置いた上で答えた。
「岩肌巌雄（いわお）、罷波町警察署、重大犯罪課の警部よ。この名前に聞き覚えはない？」
「巌……雄……」聞き覚えがあったのだろうか、珍しく真面目な顔で考え込んでいる。あんな顔した家綱を見るのは久しぶりだ。それほど重要な人物なのだろうか。
　ボクが目の前で暫く眺めていると、家綱は突然目を見開き、眼前のボクを振り払って岩肌さんの肩を掴んだ。
「何やってんだ」と叫んでは見たが、家綱は気にも留めず、必死そうな顔で岩肌さんに問い掛ける。

「別嬪さん、あんた……”岩肌”っつったよな。あの人との、関係は？」
「娘よ。それよりその反応、貴方……父さんの事を、知っているの？」
家綱の尋常じゃない狼狽え振りを見た岩肌さんは、努めて冷静に問い掛ける。家族の事だと言うのに流石は刑事だ。
けれど家綱は、不思議なことに岩肌さんを突き放すことも、話したくないと口を閉ざすこともせず、彼女の肩を抱いて涙ぐんだのだ。
「そうか、あんたが。そうか……無事だったんだな……よかった……」
その涙の意味はボクにも岩肌さんにも分からなかった。ボクらの疑問などお構い無しに、家綱はただただ彼女の肩を抱いて泣いている。
何でもいいがこれじゃあ埒が明かない。岩肌さんは「落ち着いて下さい」と家綱を強引に振り払った。
「何なんですか貴方は！　泣いてないで訳を話して下さい」
「そうだよ家綱！　訳が分かんないよ」
「俺だって分かんねぇよ！　一体どういうことなんだ別嬪さん！」
「は、ぁ！？　何でそこで私に振るんですか！」
なんだこりゃ。これじゃあまるで笑えない三流コントだ。話が進まなくてしょうがないじゃないか。
「とにかくさ、岩肌さんのお父さんの遺言、まずそれを聞いてみようよ。どういうことなのか、分かるかもしれないし」
「それもそうだな」家綱が言った。「別嬪さん、聞かせてくれないか？　その遺言って奴をよ」
家綱の頼みに、岩肌さんは黙って頷いた。
「一昨日の夜のことよ。罷波の駅構内で、身元不明の不審者が『私の名前』をしきりに呼んで、ここに来るようにと警察に連絡があったの。馬鹿馬鹿しいと思ったけれど、警察官として放っておく訳にはいかなかったし、仕事も終わった所だったから、行かない理由が

なかった。
　それが一年前に行方不明になった父さんだったなんて、あの時は想像もしてなかったわ。髭は伸び放題で頬は痩け、虚ろな顔で遠くを見つめている姿を見たら尚更ね。父さんは私が来たと分かると、残った元気を振り絞って私の肩を抱いてくれた。抱くと言うより、力なくもたれ掛かるその感触が『もう長くない』ということを分からせてくれた。とっても辛かったわ。
　でも、それも父さんの言伝てを聞くまでだった。父さんは七重家綱という男の名を挙げてこう言ったの。『お前を相棒に選んで、本当に良かった。』って」
「それから……どうなったんだ？」悲しそうな表情を浮かべて家綱が言った。
「力なく微笑むと、それ以上は何も言わなかったわ。もう思い残すことはないって言いたげな、晴れやかな顔してね。救急車を呼んで、すぐに病院に搬送したけど、回復することなく息を引き取ったわ。結局、それが父さんの最期の言葉になってしまった……」
　岩肌さんの言葉に、家綱は人差し指に顎を乗せて暫く考えると、彼女に向かい「言っとくがな」とぶっきらぼうに言った。
「俺が巌（ガン）さんと行動を共にしたのはたったの二日間だけ。この一年間、あの人がどこで何をしていたのかは分からんぜ」
「話してくれる気になったのね」岩肌さんが声を上げる。「それでもいいわ。話して」
「血生臭く、後味の悪い話になるかも知れないぜ。いいのか？」
「そのためにここに来たのよ。血生臭かろうが何だろうが、包み隠さず全部話して頂戴」
「君のお父さんを侮辱するようなこともあるかも知れない。それに君にとって……」
「あぁ、もう！　つべこべ言ってないでとっとと話す！　覚悟は出来てると何度も言ってるでしょうが！」
　業を煮やした岩肌さんに当たり散らされ、困り顔で済まんと謝る

家綱。岩肌さんじゃないが、何故こうも引っ張るのだろう。そこまで聞かせたくない話なのだろうか。岩肌さんのお父さん。家綱と組んで一体何をしたって言うんだ？

「由乃」そんなことを考えていたボクに、険しい顔付きの家綱が声をかける。「悪いが俺にもコーヒーをくれ。長い話になる」

いつになく真面目な顔だ。妙な勿体振りといい、さっきの涙といい、今日の家綱は何かがおかしい。一体どんな話をしようと言うんだ。

と言うわけで、キッチンに入ってコーヒーを淹れる。インスタントの粉をカップに入れて少量のお湯で十分に溶かし、そこに適量のお湯を加えて締める。インスタントでもそれなりに美味く飲めるやり方だとインターネットで載っていた。

朝一番でコーヒーだけでは物足りないだろうと思い、トーストを焼いてベーコンエッグを乗せて二人に出した。この時『卵から作られたもんにゃ、同じ卵で出来たマヨネーズをかけるのが道理だろ』、『卵料理にかけるならケチャップでしょ。異論は認めない』などと激しい議論が交わされたが、ウスターソース派のボクには関係ないし、どうでもいい話なので触れないでおく。

それなりに熱い議論の後、双方が双方の味を認めて和解し、ベーコンエッグトーストを胃の腑に落とし込んだ所で、家綱は漸く本題を話し始めた。

「あれはそう……、俺が”C”の野郎の所に行く数日前、ってところか。依頼をこなしてコツコツ貯めたなけなしの金を握り締め、意気揚々と罷波の競馬場に行った日だ。今日は大穴、どでかいのが来るぞと噂になってて、実際に周りでちょくちょく当たりが出てたんだが、俺には掠りもしない酷い有り様でよ。流石に諦めて帰ろうと思ったんだが……」

どの口が『地道にコツコツ』だなんて言うんだよ。ボクに前借り頼んでまで競馬や宝くじに精を出し、挙げ句返済のアテまでギャン

ブルの賞金だって中毒者（ジャンキー）のくせに。
あぁ、もう。突っ込む気も起きやしない。ここは一つ、最後まで話を聞いてやるか。どうこうするのはそれからだって遅くはないだろう。

◆◆◆

「がァーッ、ちくしょう！　一着ジュンケツコータロー、二着グリグリグラグラ、三着チョーカイアブダクションかよォ……。二着と三着が逆なら、逆であったならッ！」
その日の俺は、人生最悪と言っていいほどの不調だった。大勝ちどころか、小さい当たりすら掠りもしない。六千円もあった軍資金も、残りはたったの二百円。どうしてこうなった、どうしてこうなった！？
嗚呼もし時が戻せたなら、四時間前の自分をぶん殴りたい。金を溝に捨てる気か、その金で何が出来ると思う。スロットもルーレットも麻雀も出来るんだぞと説教してやりたい。まぁ、現代の科学技術じゃ、タイムマシンの製造なんて無理な話なのは分かっているのだが。
金がない以上、こんなところにいても鬱になるだけ。とっとと立ち去ろう。由乃にどうやって言い訳すっかなぁ。あいつに借りた金も全部注ぎ込んじまったしなあ。
俺が口うるさい同居人への言い訳を必死に考えている中、その男はやって来た。
「よォ兄ちゃん。シケた面してんなあ。折角の男前が台無しだぜ」
俺の肩を叩いて声をかけて来たのは、地肌がうっすら見える程の薄毛で、顔の至る所に深い皺が刻まれた、しゃがれた声のオッサンだった。腿辺りまで伸びた暑そうな鼠色のコートを身に纏い、使い込まれて底の薄そうな茶色の革靴を履いている。
「悪かったね。負けが込んでんのに笑えるかよ」

「いけねェなそいつはよ。勝ちってのは最後までふてぶてしく笑ってる奴の所に来るもんだ。そんなに沈んだ顔してちゃあ、勝利の女神様がそっぽ向いちまうぜ」
「何だそいつは。格言か何かかい」
「いいや、おじさんの経験則さ。ここぞって時に笑えない奴は何だって落とすぜ。金も、命も」
命も、ねぇ。物騒なこと言いやがる。しっかしなんでこうもお節介なんだ。負けに負けた俺を笑いに来たってのか？
「悪いがもう帰るんだ。うっとおしいから関わらないでくれよ」
面倒だと別れを告げて踵を返す。とっとと事務所に帰ろうと思ったのだが、オッサンは俺の肩をむんずと掴んでこう言った。
「まァそう焦んなよ。おじさんの言う通りにすりゃあ必ず稼げるぜ。ただし、一勝負限りだがな」
「はぁ？　何を馬鹿なことを。イカサマか八百長でもやろうっての？　あんたそっちの筋の人なのか」
「違う違う、おじさんはただの見物人だ。別に何もしねぇよ。ただ、次のレースで勝つ馬が解るってだけさ」
ぺてん師や八百長興行人でもないってのに、次のレースの勝ち馬が解るという。自称見物人のオッサンがだ。これを怪しいと言わずして何とする。
「会ったばかりのオッサンなんか信用出来るか。こちとら残り二百円しかねぇんだぞ、俺は帰る」
「二百円もありゃあ十分だ。万札に替えて帰れるぜ。おじさんの言う通りにすればだが」
オッサンも意固地だ。一歩も退きやしねぇ。一体何なんだこのオヤジは。それでも尚難色を示す俺に、オッサンは財布の中から千円札数枚をちらつかせて言った。
「じゃあこうしよう。アンタがおじさんの言う通りに馬券を買って外れたら、外れの分は俺が持つ。勝っても負けても損はないってこった。どうだ？」

「どうだ……って」
訳のわからないオッサンだ。見ず知らずの男に、勝負のアフターケアまでするか？　普通。何が目的なのか、どんな裏があるんだか、さっぱり分からん。
しかし、好条件なのは確かだ。負けて損することはないし、何より金がない。だったら受けて見るのも悪くはないか。
「わーったよ。乗ったよ乗った。んで、俺に何をしろってんだ？　勝ち馬の騎手（ジョッキー）に嫌がらせでもしてこいってか？」
「だから、おじさんの言う通りに馬券を買えって言ってるんだよ。次のレース、五番に有り金全部注ぎ込んで来い」
「ごばン？　『シクルチャンチョーハッピー』って……んなのほほんとした名前の馬が一着取れるのかよ」
「そうだ、五番だ。名前や見てくれなんざどうだっていい。さっさと買ってきな」
腑に落ちないが、乗った以上は仕方あるまい。俺は五番の馬に全財産を注ぎ込んで、オッサンと一緒に観客席に座り込んだ。
「周りの奴らに聞いたぜ。五番の馬、弱すぎて誰も券を買わないせいか、オッズが最高額らしいじゃねぇか。どうすんだよ」
「そいつぁいい。勝ちゃあ賞金一人占めだぜ。物は考え様だ」
「そりゃそうだけどよ……」
そういう問題かよと文句をつける前に、賭けは締め切られ、馬たちは出走してしまう。後はもう、神のみぞ知るというやつだ。

――――さぁ始まりました注目の第十七レース。トラック十周の長距離走を征するのは果たしてどのうまか。
――――一番『パツキンボイン』、大方の予想通り首位を独走。二位以下を突き放して一気に進みます。一番から遅れること二馬身、三番の『マミサンモグモグ』と二番の『ブルブルレットブル』が続きます。更にその背後で火花を散らす四番の『サージェントエチゼン』と六番の『ヤルッシュキアイダー』。まだ一周目だというのに

気合いは十分。勝負はまだ分かりません。
――――そして、トップ集団から遅れること六馬身半。五番の『シクルチャンチョーハッピー』。先程のにわか雨でぬかるんだ地面に大苦戦。思うように走れない模様です。五番には気の毒ですが、勝負はあの五頭の中から決まるでしょう。

「あぁあ、もう目も当てられん。俺の二百円をどうしてくれんだこの野郎！」
「結果を急ぎ過ぎだぜ、若けぇもんの悪い癖だな。まぁ、最後まで見物してな」
　引き離されて先頭集団に入れない五番の馬を見ても尚、オッサンはにたにた顔を崩さない。半分も過ぎたってのに、なんでそうも呑気でいられるんだ。最初から勝負を投げてるんじゃないだろうな。冗談じゃねぇぞ。
　苛立ちに任せオッサンに騙したな！　と叫ばんとしたその時、レースは思わぬ方向へ向かい始めた。

――――おぉっ、とぉ！？　これはどうしたことだぁ？　熾烈な四位争いを続けていたサージェントエチゼンとヤルッシュキアイダー、慣れない泥濘（ぬかるみ）での走りが足に来たか、六週目半ばにしてまさかのペースダウン、ダウン、ダウン！　最下位のシクルチャンチョーハッピー、一気に四位に順位を伸ばします。
――――二頭を抑えて調子づいたか、二位三位を刺しにかかるシクルチャン、途中までの不調が嘘のように軽快な走りを見せています。
――――調子付いたシクルチャンがマミサンモグモグとブルブルレットブルに追い付きました。強豪の二頭相手に、足並みどころか呼吸すら乱さないシクルチャンチョーハッピー。彼が今、二頭を抜いて一気に二位に躍り出ました！　これはひょっとしたら、ひょっとするかもしれません！
――――さぁいよいよ九周目、ラストラップです。二週半の距離と

強靭なスタミナで首位・パツキンボインを射程に捉えたシクルチャン。その差は約半馬身、十分に首位を狙える位置です。しかし相手は二馬身以上他の馬を寄せ付けず、十五回連続首位のパツキンボイン。シクルチャン奇跡の快進撃も、さすがにここでストップしてしまうのでしょうか？

――――おぉ、おぉッとぉ？　これは一体どうしたんだぁ！？　シクルチャンと並び立ち、熾烈なトップ争いを続ける王者パツキンボイン、ここでまさかの失速、失速ですッ！　今まで圧倒的な勝利しか経験していなかったことが仇となったか、追い縋（すが）るシクルチャンの気迫に気圧され、足並みを大きく乱しています！　シクルチャンチョーハッピー、ここぞとばかりに必死の追い上げーッ！

――――残り数十メートルの所でパツキンボインを抜き、今ゴォォォオル！　シクルチャンチョーハッピー、まさかまさかの番狂わせ、大勝利ですッ！　シクルチャン早い！　シクルチャン強い！

予想外のレース結果に会場が大ブーイングの中、俺は四百倍に膨れ上がった二口の馬券を握り締め、開いた口が塞がらず途方に暮れていた。見た限りイカサマがおこなわれた形跡はない。五番の馬は自分の力で首位を取っている。だが、そんなことがあり得るのか？

そもそもこのオッサンは何故この結果を予測できたのか。分からないことだらけだ。

途方に暮れる俺の背中を、オッサンは景気良く叩いて言った。

「な、言った通りだろう。おじさんに任せときゃあ何の問題もねぇってよ」

「そいつは悪かったがよ」俺は叩かれた背を擦りながら言い返す。

「あんた、どんな魔法使ったんだよ。騎手と裏取引でもしたか？コースに何か仕掛けたってのか」

「だから、何もしてねぇと言っているだろう。まぁ何かしたとすりゃあ……、コースの状況と馬の状態を見てきたってだけだ」

「……それだけ？」

「それだけ」
コースと馬の様子を見ただけ？　それであんな予測が出来たって言うのか？　あり得ないと言うか、そんな予想、誰だってやっている筈だ。
「答えになってないぞ。それでどうして予測出来る」
「なぁに、簡単な推理だ。まず四番と六番の馬は蹄鉄に泥がついていなかった。さっきどしゃ降りの通り雨があったろ。あの二頭は路面が一番酷い時に走っていない。いくら若い馬だろうが、路面の状況を省みず全力で走っちゃ、最後までスタミナが持つはずがない。こいつは騎手の力量不足によるミスだな。下調べがなっちゃいねぇ。
んで、次は二番と三番だ。奴らの脚の筋肉は細くしなやか。短距離にゃあ滅法強いが、長距離となるとその細さが仇になっちまう。途中でへばっちまうのは容易に想像出来る。
そして一番人気のパツキンボイン。このコースを走り慣れてて短・長距離もこなせるとなりゃあ、勝ちはこいつで決まり……と、誰もが思うだろう。だが今日は違った。脚周りが毛羽立ってて息遣いも荒い。常勝を期待されてのストレスなのかね、騎手だけでなく馬の方も気が立ってた。そんな中で然程強くない奴が肉薄してきたらもう、まともじゃあいられねぇだろう」
「馬見ただけでそこまで分かるって……、あんた、一体何者なんだよ。ただのオッサンである筈がねぇ」
「いいや、ただのオッサンだよ。この街の警察署で働いているだけのな。あんた、七重家綱だな？　探偵の」
「何で俺の名前を……。って言うか、そこまで知ってるってことは、つまり」
「あぁ、そうだ。あんたに仕事を頼みたい。受けて……くれるな？」
急に真面目な顔をして仕事を依頼するオッサンに対し、俺は特に考えもなしに頷いた。今思うと、受けない方が俺にとっても彼にとっても幸せだったんじゃないかと思う。
それが――俺と巌さんとの最初の出会いだった。

「岩肌巌雄・上」（後書き）

馬の名前は酔った勢いで適当に決めました。
ベーコンエッグにかけるものはウスターソース派です。

「岩肌巌雄・中」

◆◆◆

「いーえーつーなー！」

「あ痛てッ、由乃てめぇ……、何しやがんだ」

ボクは怒りに任せ、家綱の頭を思い切りぶっ叩いた。少々のことなら我慢して目を瞑るつもりだったが、これは流石に我慢しきれない。

「人のお金で、人がせっせとバイトして貯めたなけなしの金で何勝手に競馬に行ってるんだよ！　勝ったから良いものの……って、勝っても良くないけど、お前のせいであの時のボクがどれだけ苦労したか、分かってるのか！？」

「悪かった、謝るよ由乃」ボクの剣幕に気圧されたか、家綱は申し訳なさそうな顔で謝った。「けどよ、俺だって何の断りもなしに金を借りたりはしねぇよ。覚えてねぇか？　ほら、一年前の俺がお前の財布に忍ばせた、あの紙」

「紙……？　そんなもの覚えてないぞ」

「何言ってんだ、入れておいた筈だぜ。俺の素晴らしく丁寧な字で”ちょっと借りるよ”と書いた紙を……」

聞いたボクが馬鹿だった。そう言えばそうだ、確かに覚えがある。折角だから外食にでも行こうと財布を覗いた時のあの絶望感、沸々と湧き上がる家綱への憎悪。全てはあの一枚から始まったんだった。ボクは今感じた怒りと、一年前に滾ったあの怒り。二つの力を一つに束ね、家綱の後頭部を掴んでテーブルに叩きつけた。

「ちきしょう！　なんてことしやがるんだこの野郎！　謝ったし、きちんと断ってただろう！？」

「余計悪いわ！　お前一応大人だろう！？　子どもの手本になるべき大人が、子ども染みた真似して盗みを働くんじゃない！」

もう無茶苦茶だ。ボクは今までこんなアホと一緒に生活していたのか。がっかりだよもう。ほら、傍目で見ている岩肌さんだって……。

「あの、由乃ちゃん、家綱探偵。そういう与太話はいいから、話を続けてもらえないかしら？」

「えっ、あぁ。あぁ……」

と思ったが、岩肌さんにとってはそれどころではないらしい。いや、よくないでしょう実際。これ窃盗ですよ。しょっぴかなくていいんですか、警察官として。

まぁでも、与太話には違いない。元々ボクが食ってかかっただけだし。仕方がないから一時的に家綱を許すことにする。あくまで一時的に、だけど。

「……もういいか？　話を続けるぜ。それで俺と厳さんは、競馬場近くのオムライス専門店に行ってだな――」

◆◆◆

岩肌巖雄（いわはだ いわお）、罷波町警察・重大犯罪課の警部。一等の馬をぴたりと当てたこのおっさんは、どうやら俺の素性を知った上で仕事を依頼してきたらしい。

俺は特に何も考えず首を縦に振り、どんな依頼だと聞いたのだが、「ここではまずい」と場所を変え、競馬場近くにある、場末の『オムライス専門店』へと連れて来られた。

オムライスと言えば、最近噂の『女子力』を上げるアイテムとして注目されているが、この店は場末すぎるらしく、若くてきゃぴきゃぴした女子は一人もいない。そもそもこんな廃れた店に入るイマドキの女子なんているのだろうか。ロザリーも纏も首を横に振るだろうな。あぁ、でも、葛葉のやつはそうでもないか。飯さえ美味ければ。

俺は店員の計らいで店の一番奥の席へと通され、おっさんの一存で『この店のお勧め』を注文されてしまった。
注文を行って店員を下がらせ、お冷を口に運んで一息付いた俺は、何用だとおっさんに問う。
「いい加減に聞かせろよ。俺に何をやらせようって言うんだ。奥さんの浮気調査か？　あんたぐらいの歳じゃあずいぶんとただれてそうだしな」
「馬鹿言ってんじゃねぇ。今年で結婚二十八年目。周りが引く程アツアツよ」
おっさんは左手でコートの右ポケットからライターと煙草の箱を取り出し、そこから一本抜いて口に加えてポケットにしまい、ライターで火を点けて言葉を継いだ。
「証拠探しさ。警察の中じゃ探せないような後ろ暗い奴のよ。こいつを見てくれるか？」
奴はそう言うと、俺に一枚の写真を見せた。今俺の目の前にいるこのおっさんと、友達にしちゃ妙に若々しい警察官が、肩を組んで楽しそうに笑っている写真だ。
「なんだよこいつ。あんたの息子か？」
「厳騎雄一（げんきゆういち）……、大分歳が離れちゃいるが、俺の相棒だよ。あいつが捕まえて、俺が取り調べ。やり過ぎだ何だと上からよく始末書を書かされていたが、それなりにいいコンビだったよ」
『コンビ』。その言葉を口にする時、おっさんの目が僅かに緩んだ。言葉以上に親密な関係だったらしい。……いや、ちょっと待てよ。
「おかしな話だな。『だった』ってのはどう言うことだ」
おっさんの眉間に皺が寄る。「死んじまったよ、ある事件を追ってる最中にな」
「あぁ、その……済まねぇな。思い出させちまったか？」
「『ゲンキ』が死んだのは三日前だ、思い出すも何も無い。それよりも、だ」
おっさんは『相棒』の写真を懐にしまい込むと、代わりに別の写

真を俺に見せて来た。
映っているのはさっきと同じ男。苦悶に歪んだ表情に、死んだ魚のような目。耳と鼻と口の周りは赤黒い染みで汚れていた。首に縄できつく絞められた跡が見える。
なるほど、両手の指がおかしな曲がり方をしていて、その全てが血だらけになっているのは、死ぬ寸前までそいつを引き剥がそうとしていたからか。

「こいつは町のモーテルの一室で見つかった。だがな、ゲンキはそんじょそこらのゴロツキにやられるようなタマじゃないし、この死体にゃあ、かなり不可解な点があるんだわ」
「不可解？　何が不可解だってんだ」
「死因そのものさ。ゲンキは能力者でな、『一度触れた縄や紐を、触ることなく自由に操る』能力を持っていた。俺が足と人脈で追い、あいつの縄が犯人を捕らえる。俺たちはそういうタッグだった。そこでコイツだ。ゲンキの奴ァ几帳面でな、犯人を捕らえる際、縄の網目と網目がズレ無くキッチリと重なる、独特の縛るクセがあった。
そこでだ、もう一度その写真をよぉく見てみな。首に残った縄の跡、網目がキチンと重なってるだろう？」
おっさんの言う通り、縄の網目は縛られたとは思えないほど綺麗に重なっている。人一人絞殺するのに、こんな手の込んだことをするだろうか。
「確かに不可解だが、それが何だってんだ？」
「それだけじゃねぇよ」おっさんはお冷を飲み干し、店員に替えを頼んだ後に続ける。「もう一つ、訳の解らないことがある。縄に”握った跡”がねぇんだ」
「握った跡……。指紋のことか？　そんなの、軍手とか手袋使えば付かないだろう」
「違う違う、言葉通りの意味だ。人一人殺すのに掛かる力は相当なものだぜ。ゴム手袋じゃ力は入らんし、軍手でやったとしても、握

り跡や繊維のほつれがあってしかるべきだ。なのに、ゲンキの首にはそれがねぇ。どういうことか……お前にだってわかるだろう？」
警察官・厳騎雄一は「一度触れた縄や紐を、触ることなく自在に操る」能力者だ。そこでこの不可解な絞殺。おっさんの言わんとしていることが、ようやく俺にも読めてきた。
「つまり『自分で自分の能力に殺された』って言うのか？　ありえねぇだろ」
「そうだな。だがよ、ゲンキの手に残っていたのは『縄を引き剥がそうとした』跡であって、自分の首を絞めた跡じゃない。状況証拠が他殺だって言ってんだ、あり得なくてもそう考えるしかないだろう」
「おいおい、マジかよ……」
「驚くにゃあまだ早いぜ。俺だってお前と同じことを思ったよ。その上で、どんな手を使っても犯人を引っ捕らえるとゲンキの墓前に誓ったさ。だがな……」
おっさんは運ばれてきたお冷を、腰に手を当てて一気に飲み干し、残った氷を喉を鳴らして飲み込んだ。
「ゲンキの死体が発見された次の日……。二日前の話だ。犯人逮捕に躍起になっていた俺に、上から突然一週間の暇と、”退職したら行ってみたい”と冗談で言っていた『熱海温泉』の宿泊券が、それと同じ日数分送られて来やがった」
上から突然言い渡された休暇に、温泉の宿泊券。警察組織にあまり詳しくない俺にだって良く分かる。
「深入りすんな……、ってことか。上から圧力かけられてる訳だ」
「俺の居ぬ間に、事件を資料ごと処分して闇に葬ろうって魂胆だろうな。首を切られないだけまだマシか。だがな、奴らがそういう手で来るんなら俺も容赦しねぇ。どんな手を使ってでも見つけ出して……おぉ、おっと」
おっさんが握り拳を作って、机から身を乗り出したその時、さっきのウエイトレスが、二皿のオムライスを持っ戻ってきた。俺は右

手で、おっさんは左手でそれを受け取る。オムライスと付け合わせの野菜たちが、熱々の鉄製プレートの上で美味そうな匂いを立ち昇らせている。

「メシも来たことだし、熱いうちにこいつをいただくとするか。話は後回しだ」

おっさんの言葉に甘え、出来立てのオムライスに口をつける。ふんわりとした外側の半熟卵が口の中でとろけ、店秘伝のソースで煮込まれたチキンライスがたまらない。おっさんが贔屓（ひいき）にするだけのことはある代物だ。

そうして暫くの間、絶品オムライスを堪能していたのだが、向かいで同じものを食うおっさんの食べ方が気になって、手が止まる。

何しろこのおっさんと来たら、右手をコートの中に入れたまま、左手で器用にスプーンを使い、オムライスを窮屈そうに口に運んでいるのだ。最初っから右手を使えばいいのに。気にならない筈がない。

「おいおい、なんだその食い方。右手も使えばもっと楽に食えるだろ」

「いいんだよ、おじさんはこれでいいの」

「よかぁねぇよ。俺は気になって仕方がない」

「んじゃあ気にするな。さっさと食えよ、冷めちまうぞ」

おっさんはそこで話を打ち切って、何事もなかったかのように、黙々とオムライスを口に運ぶ。気にはなるが、当人に話す気がないんなら追求しても無駄かと思い、諦めてメシに集中することにする。その方がこいつを堪能出来るだろうしな。

おっさんがオムライスをあらかた胃の府に落とし込んだのを見計らい、俺は右手の話とは別に、さっきから気になっていることを尋ねてみた。

「なあ、一ついいか？　あんたの怒りは尤もだし、敵討ちしたいって気持ちも良く分かる。けどよ、何故そこで俺なんだ。あんたは俺に何をさせようとしているんだ。いい加減はっきりさせてもらおう

か」
　おっさんはスプーンを皿の脇に置いて、決まってんだろと声高々に言う。「俺ァ定年間近の老いぼれだ。そう派手にゃあ動けねぇ。俺の手足になる奴が必要なんだよ。ゲンキを殺った犯人を捕まえるために、お前にはゲンキの代わりになってもらう」
「代わりってアンタ……、俺ァ探偵であってボディーガードでも万屋でもねぇんだぜ」
「まぁそう言うなよ。こいつで手ェ打っちゃあくれねぇか」
　情報収集が得意なら一人だって捜査できるだろう。俺が加わる程の事には思えない。難癖を付けて断ろうと思ったのだが、おっさんは懐から『小切手』を取り出し、左手でぎこちなく数字を書いて俺に手渡した。
「なんだよそいつは……って、おっ、おぉ……！　なんじゃこりゃ！？」
　ちょっと待て、待ってくれ。なんだこのゼロの桁の数は。余りの多さに声が裏返っちまったじゃねぇか。警察官ってこんなに儲かる仕事だったのか？　公務員という職に俄然興味が沸いてきたぞ。

「俺の貯金と退職金として貰う予定の金、ついでに送られてきた熱海温泉行きのチケットを売り払って作った。これだけありゃあ文句ねぇだろう、若造」
「いや、文句はねぇけどよ……。いいのかよこんな真似して。あんた未だ定年じゃないみたいだし、奥さんだっているんだろ？　貯えがなくちゃ生活が」
「てめぇが心配することじゃねえさ」おっさんが俺の話を遮って言う。「なんとしても捕まえてぇんだ。ゲンキのこともあるが、こいつを街ン中に野放しちゃあおけねぇ。刑事としての長年の勘が俺にそう言ってんだ。分かるか？　分かるだろう！」
「あんた、なぁ……」やってることは滅茶苦茶だが、犯人への怒りと逮捕への覚悟は理解出来た。依頼料だって申し分無い。となれば、

受けないわけには行かないだろう。
「分かった、分かったよ。受けます、受けりゃあいいんだろ？」
「そうだ、そうだよ。話が分かるじゃあねぇか」
「何を言ってやがる。無理矢理そう言わせたくせに」
おっさんは俺のぼやきを無視し、オムライスの領収書の裏に何やら、地図のようなものを描き始めた。
「この場所に深夜零時に来い。時間厳守だぞ、遅れるなよ」おっさんは言い終えると共に席を立つ。
「……ちょっと待てよ。何故夜だ。それにあんたはどこに行く」
「準備だよ準備。それに朝っぱらから動いちゃ目立つだろうが。バレたら終いなんだぜ。……んじゃ、そういうことで」
「いや……それもあるけど、そうじゃねぇよ！　なんだこの絵は！　こんなミミズが這ったような地図で場所なんか分かるわきゃねぇっつってんの！　待て、待ってくれって！」
俺の言葉に耳を貸すことなくおっさんは二人分の代金を払って店を出て行く。メシ代を払わなくて良いのは助かるが、この地図でどうしようって言うんだ。あぁ、なんで安請け合いしてしまったのだろう。後悔先に立たずとは、こういう時のことを言うんだろうな、きっと。

◆◆◆

街の中心から少し外れ、普段何をしているか知れない雑居ビル地帯の一角に、『明石屋（アカシア）ビリヤードホール』はあった。
六階建てのビルの五階に位置しているが、残りの階には何もなく、ビル内のポストにしか名前が載っていない所から、何やら怪しい雰囲気が漂ってくる。
おっさんは……、ビル前の電柱の影にいた。眉間に皺が寄る程不機嫌な顔をして、黙々とあんぱんを口に運んでいる。
「ようやく来たか、遅いぞ若造。俺は零時に来いと言った筈だ。今

何時だと思ってる、零時半だぞ零時半」
「あのなぁ……」俺は深くため息を吐き、例の落書きを差し出して言う。「こんなふざけた落書きで分かるわきゃあねぇだろ！　ここまで来るのに俺がどれだけ苦労したか、分かってンのか！」
「何ぃ、おじさんのせいだってのか？　人のせいにするのか？　よくねぇなあ、そういうの」
「だったら最初っから利き手で描けよ利き手で！」
まだ何も始まっていないのに、もう疲れてきた。何なんだよこのおっさんは。

「で、なんでビリヤード場なんかに来たんだよ。仕事の前に遊ぼうってのか？」
「なわけあるか。ゲンキの奴が死んでから、あいつのデスクを漁ってみたんだが、そこで出てきたのがこの場所だ。何でも、ここの一番の腕利き”ハスラー”が、それはそれは『でかい買い物』をするらしい」
「『ハスラー』ってェと、ビリヤードをやる奴の事だよな。そいつの買い物が、この事件と何の関係があるんだよ」
「奴が死ぬ直前まで調べていた事だぜ。関係が無いわけなかろう。それに、他に手掛かりらしい手掛かりなんてねぇんだ。地道にやっていくしかあるまい」
そりゃあごもっとも。返す言葉もない。時間も過ぎて意見も一致した所で、俺たちは雑居ビルに足を踏み入れる。
エレベータで五階まで昇り、「ここで遊びたい」と受付に顔を出す。隠している割にゃあ、入口にカーペットなんか引いて、無駄に豪華な場所だ。
この手の後暗い遊び場にゃ、一見様お断り用の七面倒なローカルルールがあるものだが、俺たちは意外なほどあっさりホールに通された（流石に職業は偽ったのだが）。
お上に隠れてどんなきな臭いことをしてるかと思ったが、六十畳

はあろうかというただっ広い部屋に四つの台が置かれており、客たちが玉を突き合って和気藹々としている。楽しめているならそれが一番だろうが、少し拍子抜けだ。
「なぁ、おい。んな所で『買い物』なんて本当にやるのか？　とてもそういう、胡散臭い場所にゃあ見えないぜ」
「そりゃそうだ。楽しく遊んでる客はカモフラージュに過ぎん。本命は、あそこよ」
言って、おっさんはフロアの奥の『立入禁止』と張り紙の貼られた扉を指差した。
「……あれが、何だって？」
「でかい金の動く勝負は、全部あの部屋で行われている。ナンバーワンハスラーの、通称『玉突きタック』も、あの中だ」
「玉突きタック……ね」如何にも胡散臭い通り名だ。そんな奴がここで何を買い、この事件にどんな関わりを持つというのだろう。
俺たちは店員の制止を振り切り、立入禁止の扉を開け放す。長ったらしい栗色の髪を前に流し、先を微妙にカールさせた不可思議な髪型に、趣味の悪い紫のダブルスーツを纏った、やたらとひょろ長い男がそこにいた。
「何用だい？」押し入ってきた俺たちを、男は怪訝そうな目で見つめる。「悪いけど、今日は勝負って気分じゃないんだ。明日にしてくれないかな」
気だるそうな声で俺たちをあしらわんとするタックに、おっさんはわざと低く、凄みのある声で問う。「玉突きタック、ってのはあんたかい」
「そうだけど。だったら、何？」
「俺ァ別に玉突き遊びをしに来た訳じゃねぇ。ある事件の捜査でここに来てるんだがあんた、ここで何か”買い物”をするんだってな。何を買うのか……おじさんにもちょーっと、教えてくれないもんかね」
「何……ぃ？」

おっさんが”買い物”と口にした刹那、タックの口元が微かに歪んだ。自分でもそれに気付き、慌てて隠そうとしたらしいが、俺たちの目は誤魔化せない。
「玉突き遊びの腕はどうだか知らんが……、オタク、ポーカーフェイスってのを覚えた方がいいな。バレバレだぜ」
おっさんは玉突きタックの胸ぐらを掴み、どういうことだと問い詰める。タックは暫くなすがままにされていたが、何か閃いたのか、いい加減にしろよとおっさんを引き剥がした。
「いいよ。そんなに知りたきゃ教えてやるとも。ただし、『勝負』で僕に勝てたらね」
「待て待て。なんで俺たちが玉突き遊びしなきゃならねぇんだ」
「ここにはここのルールがある。何かを得たいんなら、相応の対価がなくてはならない。あぁっと、だからって僕を無理に捕まえようとするなよ。喰って掛かってきたのはそっちなんだからな」
腹の立つ答えだが、尤もな言い分だ。証拠も容疑も何もない今、玉突きタックから無理矢理情報を引き出すのは無理だろう。仕方の無い事だ。
だが、相棒を殺されているおっさんはそうはいかない。タックの奥襟を掴んで激しく振った。「冗談じゃねぇ。そんな理屈が通用すると思うのか、あぁ？」
「通用するさ。僕は何も悪くないんだからね」
「えぇい、減らず口を……」
まずい。おっさんの奴、隠していた右手で殴る気だ。今も十分やばいが、殴ったら取り返しがつかないぞ。あぁもう、しゃあねぇな。
――だったらその勝負、私が引き受けましょう。
探偵・七重家綱の体が光輝き、長く伸びた黒髪の美女へと姿を変える。これが七重家綱の能力だ。その名の通り（自身を含め）自分の中に内包した七つの人格を、必要に応じて呼び出すことが出来るのだ。

美女・葛葉(くずは)はビリヤード台からボールを奪って弄り回すと、並び立つ岩肌巌雄の肩を軽く撫でる。「気持ちは分かるけど、言い分はあっちの方が正しいんだし、ここは私に任せて頂戴な。おじさま」
「お前……まさか」
「そうそ。そのまさか」
今まで家綱がいた場所に、見覚えのない女が立っている。岩肌は彼女が誰なのか、家綱の能力が何なのかを概ね理解した。彼は佇まいを直して冷静さを取り戻すと、口元を軽く歪ませた。
「俺が悪かった。お前に任せるぜ、若造」
「そうこなくちゃ。ってことで……」
葛葉は岩肌のコートから、彼が先程レストランで広げていた小切手帳をすり取り、金額を書き込んでビリヤード台に叩き付けた。
「貴方が勝てばこのお金は総取り、負けても情報を話すだけで、何の損も無い。どう？　なかなかイイ話だと思うんだけど」
「成る程、面白い申し出だ」タックは一本の玉突き棒(キュー)を葛葉に寄越す。「いいだろう。その勝負、受けさせてもらうよ。この小切手の代金、ちゃんと払えるんだろうね？」
「心配しないで。このおじさま、見た目に寄らず羽振りはいいから」
岩肌の方へ振り返り、わざとらしくウインクをして見せる葛葉。いきなり出てきて、勝手に勝負を受けた彼女に不安は尽きないが、物怖じせず微笑んでいられる以上、何か策でもあるのだろう。何も言わず頷いて、彼女の手並みを拝見することにした。

ビリヤード台に十つのボールがセットされ、その直線上にボールを弾くための手玉が置かれる。いよいよ試合開始だ。タックは葛葉の後ろに回り、お先にどうぞと手招いた。
「レディー・ファーストだ。一打目(ブレイク・ショット)は君に譲るよ。勇敢なお嬢さん」
「あら、優しいのね。親切にしていただいて何だけど、手加減はしないわよ」
「ハハハ、こりゃあ手厳しい」

タックとの会話の後、台を見回し、手玉を軽く転がして調子を確かめる。葛葉は粗方確かめ終えると、キューを手に台の端に立った。
「じゃ、ぱぱーっと行っちゃいますか。そぉーれっ！」
左手の親指と人差し指で作った輪の中にキューの先を通し、手玉を突く。弾かれた十つの玉は盤上に散り、うち二つが台の端にある穴に入った。
玉突きタックは葛葉の突き方から彼女を素人だと判断し、嫌味な笑いを顔に浮かべる。「威勢良く啖呵を切るから何をするかと思えば……、よくもまぁ、あんなにお金を賭けられたものだ」
「どうでもいいでしょ、そんなこと。兎に角、ボールは入ったんだから、続けさせてもらうわよ」
キューの穂先近くを持ち、盤上に散らばる番号付きのボールを指し、その上で台の周囲をぐるりと見回す。
何を閃いたか、手玉の元に再び戻った葛葉は、タックの方を顔を向けずに言った。
「ここからは穴に入れる玉を宣言するんだったよね。じゃあ……」
葛葉は短く持ったキューで、手玉から右側にぐるりと円を描くようになぞった。線上には五つのボールが並んでいる。まさか、それら全てをこの一回で落とそうと言うのか。
「馬鹿馬鹿しい。そんなこと、出来るものか」タックが嘲るように笑う。「ビギナーズ・ラックは二度も続かない。絶対に不可能だ！」
「でも、成功すればこのゲームは私の勝ちよね。失敗するって思うんなら、そのまま見てなさいよ」
タックを軽くあしらって、キューを長く持ち直し、盤上の手玉に視線を移す。手玉に向けてキューを構えた瞬間、葛葉の表情が変わった。彼女の顔から遊びが消え、周囲の空気が張り詰めて行く。
誰も何も言い出せず、重々しい沈黙が漂う中、彼女のキューが手玉を突いた。手玉には不可思議な捻りが加えられ、葛葉がなぞったルートを一直線に進む。
捻りの入った手玉が、六番のボールを弾き飛ばした。弾かれた六

番は手玉の捻りを受けて進み、（葛葉から見て）右側中央の穴（ポケット）へ落ちて行く。残りの四番、七番、九番、三番も、同じように穴に落ち、手玉はまるで引き寄せられたかのように、再び葛葉の手元に戻ってきた。

「6、4、7、9、3。最初に入った2と5を合わせて……、36点。この勝負、私の勝ちね」

「なっ、ななな……。そんな、馬鹿なことが……あり得るのかッ！？　馬鹿な、馬鹿な馬鹿な馬鹿な！」

タックの取り乱し方は尋常ではなかった。彼女の手付きは素人のそれだ。なのに何故、熟練者である自分にも不可能な業をやってのけられるのだ。訳が分からない。

恨み節を呟いて呆然とするタックに葛葉が言う。「さ、約束よ。あなたが何を買おうとしているのか、私たちに教えてよ」

「くっ……、くぅ、うぅう……」

自分から言い出した手前、断る訳にも行かず、憎らしげに歯噛みするタック。彼は苦心の末に右腕を高く上げ、ぱちんと一回指を鳴らした。

それと同時に、拳銃を手にした屈強な男たちが葛葉たちを取り囲む。タックのおかかえかここの従業員かは知らないが、味方でないのは確かだろう。

岩肌はぴくりと眉を吊り上げ、右手をコートの中に入れたまま言う。「おいおい、ルール違反じゃあないのか？　ここで俺たちを殺ったら、警察のガサ入れが入って営業出来なくなるぜ」

「心配御無用。君たちはここには来なかったんだ。何も起きちゃいない。僕がド素人に負けたことも、何もかもね」

「負けた腹いせで人を殺すのか。いい歳して何やってんだい」

「ガキと一緒にするな。こっちは生活懸かってんだよ。常勝無敗のこの僕が、素人なんかに何も出来ずに負けたとあっちゃあ、商売上がったりなんだ。大人しくここでくたばってくれ」

「そいつぁ御免だ。死んで行方不明にされちゃあ、生命保険もあったもんじゃねぇからな」
岩肌の軽口に痺れを切らした黒服たちが、彼に銃口を突き付け、引き金に指をかけた。葛葉は冗談じゃないと、上着の中に手を入れるが、彼女が銭を投げるよりも早く、岩肌のコートの中にしまわれていた拳銃が火を噴いた。
コートから銃を抜くと共に前方の二人を、男たちが引き金を引くより早く、振り向きざまにもう二人。屈強な黒服たちは、瞬きする間も無く地に伏した。
四人が四人とも、正確に脇腹を撃ち抜かれており、拳銃をその場に放って血を噴いている。あれだけの早業で正確に同じ場所を狙い、しかも殺さずに倒している。この男の実力は相当なものだ。葛葉は額から冷や汗を垂らし、ごくりと唾を飲み込んだ。
「何よおじさま。そんなに強いのなら、私たちの護衛は必要無いんじゃないの」
「いいや、おじさんは相当な老いぼれだよ」岩肌は床に蹋(うずくま)る黒服たちを指して続ける。「あれ見ろ。少し血ぃ噴いてやがる。若ぇ頃は余計な怪我をさせず、動きだけを止められたんだがな……っと」
倒れ込む黒服たちにすまんと一声掛け、岩肌はタックの元へと歩を進めて行く。
「悪いなァ、ボウズ。もっかいどん底から這い上がってくれ」
「うぅ……うあ、わあああッ！」
タックは恐ろしさのあまり、小便を垂らしてへたり込む。このままでは殺される。頼れる者は誰もいない。自分が何とかしなくては。
追い詰められて狼狽えるタックの手に、固くて重い感触があった。黒服たちが落とした拳銃だ。彼は迷うことなく銃を拾い、迫り来る岩肌に向けて引き金を引いた。
引いたまではよかったのだが、恐れをなしてうち震えるあまり、弾丸は岩肌から大きく反れて、腹を押さえて苦しがっている黒服の脹ら脛に当たり、彼に野太い悲鳴を上げさせる。

岩肌はタックの右太股に一発撃ち込んで彼の自由を奪うと、長く伸びた前髪を掴んで左のこめかみに銃口を突き付けた。
「さぁて、そろそろ教えてもらおうか。お前は一体何を、誰から買おうとしてるんだ？」
「し、知らないよ。何のことだ」
「とぼけちゃあいけねぇ。ンなもん嘘だって最初から分かってんだ」
岩肌は銃の撃鉄を起こして続ける。「何分久し振りでよ、夢中になりすぎて何発撃ったのか忘れちまった。もう六発撃ち尽くしたかも知れねぇし、まだ一発残ってるかも知れねぇ。なぁ、おじさんに話しちゃあくれないかね、お前がここで誰と会って、何を買うのか」
岩肌の瞳は黒く澱んでいる。彼は本気だ。黙秘を続ければ確実に頭蓋骨に風穴が開くことだろう。背に腹は替えられない。タックは大袈裟に首を縦に振った。
「分かった。言う……言うよ。今夜の二時半に『カード』を買うつもりだったんだ」
「それが一体何だ。俺たちを殺してまで隠したいものなのか？」
「あァそうだ。まだ闇市にすら出回ってないからな、知らなくて当たり前さ。どういう原理かは知らないけど、『カード』は人に”能力”を与えるんだ。どこの会社の奴かは分からない。僕が知っているのはこれだけ。後は何も知らない、本当だ」
「能力を……ねぇ」
人に”能力”を授ける『カード』とは何か。もしそれが本当なら事だが、何処まで信じて良い者か。岩肌は少し考えた後、銃口をタックのこめかみから離し、掴んでいた前髪を放った。
「そうかい、ありがとよ」
「はっ、はは……は」
命の危機が去り、タックは力無く安堵のため息を漏らす。だがそれも束の間、岩肌は笑顔で彼の眉間に銃口を向けた。
瞬間、乾いた破裂音が響く。玉突きタックの頭は鉄臭い血を撒いて周囲に飛び散った。

「そんな！　何も殺すこと無いじゃない」葛葉は何てことをと岩肌に掴み掛かり、彼の頬に平手を喰らわせる。しかしどうしたことか、銃を手にした岩肌自身も、目を見開いて呆然としている。
「俺じゃない。こいつには最初から五発しか装填されてないんだぞ」
言って、何度か引き金を引いてみる。かち、かちと音を立てるばかりで、弾丸は一発も出てこなかった。
「でも……。だったら誰が」
「俺でもおめぇでもないとしたら……危ねぇ！」
岩肌は葛葉の体を抱きかかえると、その場から飛び退き、ビリヤード台を横倒しにして、その後ろに身を隠す。
彼女たちが今までいた場所には、硝煙の臭いと焦げ付いた丸い穴がぽっかりと開いていた。
何があったのかと、出入口の扉に顔を向ける。白いシルクハットを目深に被り、膝まで覆った黒コートと、異様に不気味な出で立ちの人物が、岩肌が持っていたものより一回り大きな銃を構えて立っていた。
「何！？　さっきのやつらの仲間か何か？」
「だったら、頭目のタックを撃ったりしねぇだろ。ってェことは……」
岩肌の言葉を遮るように、白ハットの銃口が動いた。壁越しに撃って来るのかと身構える二人だが、奴の狙いは彼らではなく、立ち上がれずに苦しがる黒服たちであった。
黒服たちもまた頭を撃たれて脳しょうを撒き、命の灯を散らして逝く。次は岩肌たちの番だ。再び引き金を引く白ハットだったが、そこから銃弾は撃ち出されなかった。岩肌のそれと同じく、白ハットのものも弾切れを起こしたのだろう。
弾丸を拳銃に込め直さんとする白ハットを見、岩肌は声を張り上げた。「今だ、取り押さえろ若造！」
「あ……、え、えぇ！」
促され、葛葉はビリヤード台を飛び越えて突っ込む。白ハットは

捕まるよりはと手にした銃を放り、元来た道を逃げていく。
こうなれば女の自分よりも体力のある男が行くべきだ。葛葉はそう考え、駆け出すと同時に体の主導権を家綱に返した。

俺――七重家綱は、奇抜で意味不明の白ハットを追った。奴め、相当足が早いぞ。このままじゃ逃げられちまう。何かないのか、何か……。

いや、あったぞ、これだ！　ホールからエレベータを繋ぐ通路に敷かれたカーペット。こいつを使えば行ける！

「待ちやがれ、こんにゃろう！」奴が右足で踏み込むのに合わせ、カーペットを思いきり引いてやった。赤く長い絨毯は俺の方に向かって激しく波打ち、奴は受け身も取れず、床に頭を強かにぶつけた。

「手間取らせやかって、何者だお前！」動けないでいる奴のうなじを掴み、ハットを奪って俺の方へと引き寄せる。

玉突きタックも四人の屈強な黒服たちを殺し、あまつさえ俺たちまでも手に掛けようとした白ハットの正体は、薄緑の長い髪を二つに束ねた、由乃と同じくらいの少女だった。

俺が怖いか、ぶつけた頭が痛むのかは分からんが、瞳が瑞々しく潤んでいる。

「……って、なんだよこれ！　あり得ねぇだろ、絶対おかしいだろ！」

今の今まで追っていたのは、黒服たちよりも一回り大きい奴の筈だぞ。それが何故由乃位の少女になっている。

俺ァ奴から片時も目を離さなかった。このホールは五階にあり、唯一の出入り口であるエレベータまでの通路までは一本道だ。別の場所から入って来れる訳がない。

「お前、一体なんなん……だッ！？」だが、そこで思い悩んだのがいけなかった。奴は俺の手が止まったのをいいことに、自由の効く右足で俺の脇腹を蹴り付けやがった。視界が歪み、もんどり打って床に叩きつけられる。不覚を取ったとはいえ、なんて力だ。

待てよ。……ちから？　力って何だ。怯むならまだしも、小柄な女の子に蹴飛ばされて、何故俺は宙を舞っている。あり得ねぇだろ。そして何だ。あいつの「丸太のような」ぶっとい足は。どう見ても女の子の足じゃあねぇだろ。

もしかしたら、こいつは……。

「おぉい、大丈夫か若造」そうこうしているうちに、おっさんが俺の元へと駆けて来た。「よく生きてンな。怪我はねぇか」

「昼に食ったオムライスが逆流しそうだが、問題ねぇ」

「ならいい。捜査が始まったばかりで相棒に死なれちゃ、話にならん」

「そりゃあそうだけどよ……。済まねぇおっさん、目撃者殺しのアイツを……逃がしちまった」

目を伏せてそう言う俺に、おっさんは「気にするな」と言う。「そうさな。確かに死人は口を利かねぇ。けどよ……、書き置きくらいは残しておいてくれるらしいぜ」

そう言って、おっさんがコートの中から取り出したのは、タグに”ももいろパラダイス　４－２０３”と書かれた小さな鍵だった。

◆◆◆

雑居ビル街を離れ、バスを何度か乗り継いた海沿いに、ホテル・ももいろパラダイスはあった。場末に建てられたからか、世辞にも流行っているとは言えず、犯罪者たちの密会には丁度良いい場所だ。

どういうホテルなのかは聞いてないが、宿泊施設らしからぬ目に悪い桃色の照明と、壁越しに聞こえる男女の淫らな喘ぎ声から、俺は兎も角、由乃を関わらせては行けないことだけは分かる。

しかし、この手のホテルに野郎連れで入るのは怪しすぎるな。何か手はないものか……。

「……四階の２０３号室に予約を入れていた弾田（たまだ）だが」
岩肌巌雄はどうやら、鍵の持ち主である玉突きタックの名を借りて潜入することにしたようだ。
「いらっしゃいませー。お二人様で宜しいでしょうか？」受付嬢はそう言って微笑み、お辞儀で栗色のくせ毛長髪を揺らす。
彼女は受付という役職におおよそぐわない、薄桃色でスカートの丈の短い女性看護士の制服を身に纏っていた。カウンターの奥に置かれていた帳簿に目を通し、彼女はそこに弾田の名を見付け出す。
「弾田、弾田……。あぁ、弾田卓朗（たくろう）さまですね。承っております。それで、そちらのお連れさまは……」
「ダーリンの嫁の七重葛葉でーす。よーろしくー」
さすがに男同士ではまずいということもあり、家綱は葛葉の姿を取って潜り込むこととなった。
因みに纏やロザリーにも声が掛かったのだが、纏には取り付く島なく断られ、ロザリーを連れて入ると別の意味で危険だということで、葛葉がこの役を担うことになった。
歳は相当離れていたが、何の問題もなく通され、二人は奥の部屋へと歩を進めて行く。
歩きながら、岩肌が申し訳無さそうに言う。「済まねぇな。こんなおじさんと夫婦にされちゃあ、迷惑だろ」
「別にいいよ。フリでしょ、フリ。だったら気にしない、気にしない」
「そう言ってくれるのは嬉しいんだけどよ……」コートの中に手を突っ込み、中にしまわれたあんぱんを奪う葛葉の手を取って、岩肌は言う。「そりゃあ俺のあんぱんだ。蓄えてる分まで全部食うなよ」
「まーまー。必要経費必要けーひー。にしてもこのあんぱんおいしいじゃない、どこのもの？」
「ンなたらふく食って味分かるのか……。こいつァ”満月堂”のだ。俺が若けぇ頃からの馴染みでな。張り込みン時はいつもこの店のあんぱんさ。どうだ、うめェだろ」

「うん、うん。うめェ。だから、もう一個貰うね」
「だッ！　そいつぁ最後の一個だぞ。誰が渡すかッ」
あんぱんの最後の一つを取り合いつつ、タックが部屋を取った２０３号室へと辿り着く。入口で聞き耳を立てるが、物音は何も聞こえず、ノックをしても反応は何も無い。
「静かね。居ないと分かって帰ったのかしら」
「或いは、罠を仕掛けて待ち伏せているかもしれん。慎重に行くぞ」
タックから奪った鍵を使い、慎重に扉を開けて行く。中央には回転式の如何わしいベッド、左脇にはシャワー室が完備された普通の部屋だ。
岩肌は銃を、葛葉は右手に銭を構えて辺りを探るが、何かが隠されている様子もない。どうやら売人よりも先に辿り着いたようだ。
「手掛かりは無し……。売人とやら待ちって所か」
「あぁっ、ちょっと待って！」そう口にした瞬間、葛葉の体が目映く光る。別の人格が表に出てきた合図だ。
「そこのヒゲオヤジ。命が惜しいのなら、直ぐ様この部屋から離れなさい」
甲高い声に高圧的な口調。今回顕現してきたのはロザリーのようだ。
「へぇ、お前が噂の『ロザリー』か。何故そう思う、勘か？」
「えぇ。でもこれは勘というか……、感覚ですの。貴方に敵意のある何かが二つ……、いや、一つ。ここに真っ直ぐ向かってきていますの」
「敵意ねぇ……」岩肌は顎に人差し指を載せて思案する。「つまり、エージェントＢの野郎がここに来るって訳か。でかしたぞ若造」
ロザリーの手柄を称え、笑顔で彼女の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「ほ、誉めても何も出ない……、というか、私は逃げなさいと言っていますのに」
頬を紅潮させて恥じらうロザリーを無視し、岩肌は彼女に上着を脱がせ、彼女の胸元に手をかけた。

「と、言うわけで。君も少し協力してくれや……っと」
「わわ、わわわわっ！？」
ロザリーの胸元に手をかけた岩肌は、そのままさっと下に引いて彼女の白い柔肌を露にさせたのだ。
彼女の顔はあっという間に真っ赤に染まり、岩肌の左頬に強烈な平手が飛ぶ。
「何のつもりですのドエロオヤジ！　ことと次第に依ってはただじゃあ……」
岩肌は彼女の平手をものともせずに続ける。「お前はタックと楽しんでた。奴をこの部屋に誘い込め。後は俺がやる」
「ちょっと！　人の話を聞きなさいッ」
彼の無礼千万の行動に、ロザリーは顔を真っ赤にして喚き散らす。だが喚いてばかりもいられない。足音はこの部屋を目指して徐々に大きくなっている。
岩肌はベッドを乱し、バスルームのシャワーを出して、出入り口の裏に身を隠した。「後は任せたぞ、うまくやれよ」
「うまくって……あぁ、もう！」
岩肌は気に食わないが、やらなければ己の身も危うい。ロザリーは一頻(しき)り喚いた上で仕方がないかと溜め息を吐いた。

戸を叩く音が響く。間違いなく奴だ。ロザリーは息を深く吸い込んで扉を開ける。
彼女の目の前に現れたのは、色黒の肌に、反射して何か映りそうな程に禿げ上がった、恰幅の良い男性だった。男はかけていたサングラスを外してスーツの胸ポケットにしまい、部屋の中を見回した上で口を開いた。
「弾田卓朗はどこにいる」
「バス・ルームですわ。あれだけシャワーが出ていて分かりませんの？」
「成る程……。ところで、キミは誰だ？」

「カレのツレですの。それ以上でもそれ以下でもありません」
「そうか」男はロザリーの姿をしげしげと眺めて思案する。「奴にそういう趣味があるとはな。まぁ、それはどうでもいいか。脇へどきな、痛い目に遭いたくなければ」
「言われなくとも、そうさせていただきますわ」
求めに応じ、左脇にどいて黒服を招き入れる。彼はタックの名を呼びながら部屋の奥のバスルームに近付いて行くが、反応はない。
突然、出入口が音を立てて閉まった。男はこれが罠であると理解し、懐から拳銃を抜いて振り返る。
「悪ィな、タックの奴じゃなくてよ。待ってたぜ」
「何だと……？　貴様ッ！」
男は岩肌の存在に気付くと同時に、銃の引き金に指をかけるが、岩肌は彼が撃つよりも早く、数発の弾丸を男の腹に叩き込んだ。
男は反動で仰け反り、苦悶の表情を浮かべて仰向けに倒れ込む。
「安心しろ、急所は外してある。さぁて、ここでタックと何をしようとしてたのか、話してもらおうか」
岩肌は銃をコートにしまい、仰向けになった男に近寄る。人ひとり程の距離まで接近した所だっただろうか。男に何か只ならぬものを感じたロザリーは、岩肌に向かい危ないと声を張り上げた。
「危ないって何だ……？　って、うぉぉっ！？」
彼女が声を上げるも間に合わず、岩肌は男の前蹴りを喰ってドアに叩き付けられた。黒服スキンヘッドが腹を擦りながら起き上がる。彼のスーツ、その下のシャツには撃たれて付いた穴がある。だが、彼自身は痛みを気にする様子は無く、傷口からは一滴の血も流れていない。これは一体どう言うことなのか。
「ぎっくり腰にでもなったらどうするんだ、まったく……」男に続き、岩肌も痛む腰を擦りつつ立ち上がる。体勢を立て直した彼が最初に目にしたのは、黒服スキンヘッドに捕まり、こめかみに銃口を突き付けられたロザリーの姿だった。
「動くなよ。あんたのツレのバービー人形を粉々にされたくなかっ

たらな」
　岩肌は脅しに動じず、冷ややかな目で男を睨み付ける。「内臓を外して右脇に二発、左脇にもう二発撃ち込んだ筈なんだがな。何故立っていられる？　ただ腹筋が強いってだけじゃ説明が付かねぇぞ」
「まだ気付かないのか？」男が得意気に言う。「これが俺の能力なんだよ。俺の体は鋼のように硬いんだ。頭の先から足の指まで全部全部、ぜぇんぶな」
「……わざわざ教えてくれるとは余裕だなボウヤ。思い切りの良い奴は好きだぜ」
「黙って手を頭の上に乗せろ。こいつの命が惜しくないのか」
　岩肌は言う通りに両手を頭に乗せつつ続ける。「それはそうと、お前は『そいつ』を”バービー人形”だとか言ったな。だがよ、おじさんには『G・Iジョー』に見えないぜ」
「G・Iジョー？」何を馬鹿なと下を向いた瞬間、男の右胸に強烈な肘打ちが襲う。”それ”は、彼が痛みに顔を引き吊らせた隙を突き、彼の右手を両手で掴むと、一本背負いの要領で床に叩き付けた。
　彼を見下ろして立つのは、黒服スキンヘッドと同じか、それ以上の体躯の男。七重家綱の七人格のひとり、巨漢のアントンだ。
「ワターシを人質にショーナド、百億コーネン早イノデス。恥ヲ知リナサイ恥ヲ！」
「ぐぬ……ぬ！」
　男は悔しさに唇を噛み、右の踵を床にぶつける。同時に靴先から仕込みの鋭利な刃を迫り出させ、アントンの腹に深々と刺し入れた。
　男の革靴が赤黒く染まり、アントンの体がくの字に折れる。スキンヘッドの黒服はそれを支えに起き上がり、反撃を見舞わんと振り被る。
　この憎き金髪の顔を凹ませてやろうと嫌味たらしく口元を歪めるが、どういう訳か腹に刺し入れた刃が引き抜けない。
　男が抜けない刃に苦心する中、アントンは顔を上げて不敵に口元を吊り上げる。

何故刃が抜けないのか、男は唐突に理解した。「おのれ、わざと刺されたのかッ！　いや、そんなことはどうでもいい。刃の先には毒が塗られているんだぞ、何故平然としていられる！」
「ソンナ事、ワターシに聞カレテモ困リマース」
「ふざけるな、そんな答えで納得出来るもの…かぁあッ！？」
男の言葉を遮って、アントンの力強い左アッパーが、彼の顎を大きく揺らす。衝撃で腹に刺さっていた刃が抜けた。アントンは頭を揺らされ意識が朦朧とする男に向かい、強烈な右ストレートを撃ち込んだ。
男はもんどり打って壁を砕き、隣の部屋まで吹き飛んでいった。

「やるじゃねぇか、若造」岩肌がアントンの肩を撫でる。「いい右ストレートだ。ジムでみっちり鍛えりゃ、日本タイトルだって狙えるぜ」
「アリガターイオ言葉デスガ、ワターシ『たち』は探偵デアッテ、ボクサージャアリマセーン。他をアタッテクダサイ、オヤッサン」
「はは、違ぇねぇ」
斯様（かよう）なことを話していると、大穴で繋がった隣の部屋から、絹を裂くような乙女の悲鳴が聞こえてきた。二人はしまったと舌打ち、穴を抜けて隣の部屋に足を踏み入れる。
スキンヘッドの黒服は、相手方の男を殴り付けてベッドから引き摺り下ろし、乱れに乱れたベッドの上に陣取り、シーツにくるまった若い女性の右こめかみに冷たく重い銃口を突き付けていた。
「やれやれ……また人質か。芸が無いぜボウヤ」
「つべこべ言ってないで、銃を捨てて手を頭の上に乗せるんだ。こいつがどうなってもいいのか」
「つまらねぇな…　…」岩肌の眉間に皺が刻まれる。「抵抗するならするで、もっと俺を困らせられねぇのか。始末する気も起きん。こんな雑魚に殺されたアイツが不憫でならねえ」
「何をぶつぶつ言ってやがる。この女がどうなってもいいのか！」

「分かってンだよ、ンなこたぁ！」苛立った岩肌が声を荒らげる。
「ピーピー喚いてんじゃねぇ、三下がァッ」
苛立ちが最高潮に達したその時、岩肌巌雄は捜査官・厳騎雄一の無念と自身の怒りを弾に込め、目にも止まらぬ早さで拳銃の引き金を引いた。
弾丸は女性のうなじを掠めて男の左肩を激しく揺らす。体勢を大きく崩された黒服は、反動で捕まえていた女性を突き飛ばし、拳一つ入りそうな程の大口を開けた。
岩肌はそれを見逃さなかった。銃口を明後日の方向に向け、隙だらけとなった奴の口内を狙い、更に数発の銃弾を撃ち込んだのだ。
鐘木（しゅもく）で鐘を鳴らすかのような音が男の口内に響き渡り、やがて彼は糸の切れた人形のように、力無くベッドに横たわる。岩肌は一体何をしたのか。誰にも分からなかった。
「人間防弾チョッキってのも考えものだな」男の足を引いてベッドから引き摺り降ろしつつ、岩肌が言う。「大の男が脳震盪（のうしんとう）起こしてノビちまうとはよ。おぉい若造、こいつを部屋に戻すぞ。手伝ってくれや」
「アァ……。オウ、イエス」アントンは岩肌の求めに応じ、気絶した黒服を担いで元居た部屋へと運んでいく。
男を退かし、乱れたベッドの上から不可思議な『カード』を見付けたのはその時だ。裏は白地にアルファベットのBが、表には鈍色の”盾”のイラストがそれぞれ描かれている。
この部屋を使っていた男女に問い質して見るが、両者共知らないの一点張り。となるとこのスキンヘッドが持ち込んだ事になる。
ビリヤードホールでタックが言っていたカードと、男が所持していたこのカード。これらが無関係だとは思えない。
岩肌は顎に指を乗せて暫く思案すると、アントンが開けた穴を通って元居た部屋に戻って行く。
「お楽しみの所邪魔したな。後は二人で宜しくやってくれ」
余りの事に呆然としたままの男女に、そうして声を掛けた後で。

◆◆◆

「うう……うむむ、うう……」

俺たちを襲った黒服が目を覚ました。脳震盪から立ち直ったらしい。俺――七重家綱は、奴に自分の置かれた立場を認識させるべく、両足太股に刺さった壁の破片を更に深々と差し込んだ。

奴の額から汗が滝のように流れ出し、聞いてるこっちが身震いしそうな程おぞましい声を上げる。

一頻り悲鳴を上げ終えたのを見計らい、おっさんは奴の額に銃口を突き付けた。

「ガキじゃあるめぇし、いちいち大声出すンじゃねぇ」おっさんはコートから黒色の携帯電話を取り出して続ける。「お前の事、色々調べさせてもらったぜ。ただの人間に能力を与える魅惑のカード。そいつがお前らの商品か。てめぇは差し詰め……、組織の売人にして、カードの実験台ってところか」

スキンヘッドの視線が泳ぐ。図星を突かれて動揺しているに違いない。

おっさんは奴の答えを待たずに続ける。「喋らなくていいぜ、実はさっき『他のエージェント』から連絡があってな。俺たちみたいなのに遅れを取った奴なんざ、我らが組織には必要無いって言ってたぜ。直ぐにでも消しに来るってよ」

「ボスが俺を……？　馬鹿なッ、そんなこと、あるわけがない！」と言いつつも、男は必死に逃げ出そうと体を捩る。無駄なことを。足首を鎖で固定され、太股に壁の破片が刺さっているのを知らないらしいな。

「まぁ、逃げたくなる気持ちも分かるし、お前を哀れだとも思う。おじさんの言うことを聞いてくれるなら……、助けてやらんでもない」

「助ける……だと？　お前らごときに『あの人』が止められるもの

か」
「ンなもんどうだっていいだろう。どうせ見限られて死ぬ定めにあるんだ、義理立てする必要は無いだろ？　だからよ、一つ答えちゃあくれないかね」
――厳騎雄一を殺ったのは、誰だ？

それまで穏やかだったおっさんの口調が冷徹なものに変わった。
おっさんの勢いに気圧されたか、男は俯いて暫し考えて、仕方がないかと呟いた上で言葉を紡ぐ。
「……俺はそのゲンキって奴を知らない。だが、『エージェントQ』が数日前に”邪魔な警官を始末した”と言っていた。あんたの言うゲンキってのは、そいつなんじゃないか？」
その話を聞いて、今度はおっさんの表情が変わった。おっさんは銃口を力強く擦り付ける。
「そのQって野郎はどこにいる。奴らより先に俺に始末されたくなかったら、さっさと居場所を吐いて貰おうか」
「知らねえ、本当に知らねぇよ。各エージェントの所在はトップシークレット、ボス以外は必要な時にしか連絡が付かないんだ。俺の携帯を弄ったんなら分かるだろう！？」
俺とおっさんは互いに顔を見合わせた。この男の言っていることは正しい。奴が目覚める前に携帯を調べてみたが、組織とやらに繋がる情報は何一つ入っていなかった。恐らく、この携帯自体組織から支給された『使い捨て』なんだろう。相当な財力を持つに違いない。
だが、それだけでは犯人の特定など出来る訳がない。ここまで来て手詰まりか、と俺たちが二人して肩を落とす中、スキンヘッドは「そう言えば」と更に言葉を続けた。
「明日の深夜四時、罷波町の工場跡地にエージェントたちが集まって、ボスに販売実績の報告をする。Qもその時来るはずだ、間違いない」

「お前らみたいな秘密組織が、雁首揃えて報告に来るわけ無いだろう。つくならもっとマシな嘘にしな」
「殺されそうになってる人間が嘘言って何になる。少しは俺を信用したらどうだ」
確かにそうだ。ここまで来て嘘をつく理由は無い。怪しいが、他に手がかりも無い今、奴を信じるしかないだろう。
「……分かった、そういうことにしておいてやる。疑って悪かったな」
「あぁ、礼には及ばない。だから早くこのうざってぇ鎖を外してくれよ、頼むから」
漸く手掛かりを掴んだ。ここからが本番だ。おっさんは突き付けた銃口を離し、窓を開け放して右足を掛けた。
「おい、ちょっと待てよ。俺を助けてくれるんだろう、何処へ行く」
「勿論助けるとも」おっさんは背中越しに答えた。「お前の携帯で警察に通報しておいた。身の安全は警察が保障するから安心しろ。ついでに洗いざらい組織のことを吐いちまえ」
「おのれ……、騙したな！　おい待て、待ちやがれェ！」
奴の叫びに背を向けて、おっさんは窓を抜け、パイプを伝って壁伝いに降りて行く。
「おい、何やってんだ若造。そいつと一緒にパクられる気か？」棒立ちの俺に、おっさんは呆れ顔で言う。
「いや、だからって窓から出るのは……」
「何て言って出るんだ？　正当防衛で大男に拳銃で怪我を負わせましたと、馬鹿正直に告白するつもりか？　俺たちゃ追われている身だぜ。自分たちから捕まりに行ってどうするんだよ」
「そりゃあ……、そうだけどよ」あんた、一応警官だろう。辞める予定だとは言え、ホイホイ法に触れるような真似していいのかよ。
まぁ、今ここで言い争っていてもしょうがないか。信頼関係が必要な探偵家業で、看板に傷がついちゃあ事だ。
「もしも俺が疑われたら、あんたに脅されてやりましたって言うか

らな」
「上等」
喚き散らすスキンヘッドを後目にし、俺もおっさんに続いてホテルを後にする。
俺たちは音を立てず茂みの中に降り立つ。遠方からパトカーの耳障りなサイレンが聞こえる。奴のことは警察に任せて大丈夫だろう。
「それで、これからどうするんだよ」
「罠か本音か知らんがよ、誘いに乗ってやろうじゃねぇか。明日の深夜四時、会合に乗り込んで一人残らずしょっぴいてやる」
「そう言うと思ったよ。んで？　それまでどうすんだ」
「時間まではお役御免だ。体を休めて明日に備えろ。今度は遅れるなよ」
言って茂みを抜け、おっさんは闇夜の中へ消えて行く。後に続こうとしたが、人目を避けるためだと断られ、別々に逃げることと相成った。
『カード』を売り付け私欲を肥やす悪党共。反撃の糸口は見えてきた。
だが不安もある。俺たちが部屋を出る時のスキンヘッドのあの表情。俺たちに対する怒りはあった。けれどそれだけではない気がするんだ。一体何なのだろう、奴が最後に見せた、嘲り笑うような表情は――

◆◆◆

家綱たちが窓から去って暫くし、男が拘束された部屋に、看護士姿の女性が入って来る。岩肌たちを出迎えた受付の女性だ。
女は部屋の中を隅々まで見回すと、スキンヘッドの顔の前でしゃがみ込んだ。
「ずいぶんとやられましたね『エージェントB』。貴方程の手練れが情けない」

「エージェントQ。面目無い、まさかあんな奴らに遅れを取ってしまうとは夢にも……。いや、それよりも木の破片と足首の鎖を解いてくれ」
「いいでしょう」『Q』は満面の笑みを浮かべて言う。「ですがその前に。彼らの”誘導”は、上手く行きましたか？」
「それなら心配ない。奴はあなたが来ている事すら知らなかった。そこに隠された意図を探り出す等、不可能だ」
「成る程」彼女は男の禿げ上がった頭を優しく撫でて、言葉を続ける。「お手柄です、エージェントB。よく頑張ってくれました。彼らにやられた傷が痛むでしょう、今癒して差し上げます」
「あぁ、いや。癒すよりも前に、抜いてくれればそれで済むのだが……」
『Q』は男の言葉を無視し、今だシャワーの出続けるバスルームへと入っていく。暫くして戻ってきた彼女は、青々とした薬品が溜まった注射器を片手に不気味な笑みを浮かべていた。
「きゅ、Q……。何なんだその液体は。俺に何をしようって言うんだ」
「動かないで下さい」Qは注射器を構え、男の上で馬乗りになった。「貴方は立派にお勤めを果たされました。ボスもお喜びです。勤勉な貴方にお暇を、と言うのがボスの御命令でしたので……、失礼致します」
「まま、待ってくれ。俺は何も漏らしちゃいない、ボスの不利益になるような事は何一つしていない！　本当なんだ、信じてくれ、見逃してくれ、エージェントQ！」
Qは表情一つ変えず、涼やかな声で言った。「申し訳ありません。御命令ですので」
体を振って必死に抵抗する男を押さえ付け、彼の首筋に注射針を刺し入れる。
注ぎ込まれた液体は一瞬で男の体を満たし、彼の体から色身を奪って行く。男が泡を噴いて事切れるまで、殆ど時間は掛からなかっ

た。
Qは差込口にハンカチを当てて針を引き抜くと、任務完了だと言わんばかりに看護士の制服を脱ぎ捨てた。
「――イワハダ・イワヲ、ナナエ・イエツナ……。覚えましたし」
うわ言のようにそう呟いたQは、男が落とした拳銃を拾い上げると、隣の部屋の男女を撃ち殺し、悠々と部屋を出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2806r/

外伝・七式探偵七重家綱

2011年12月29日22時48分発行